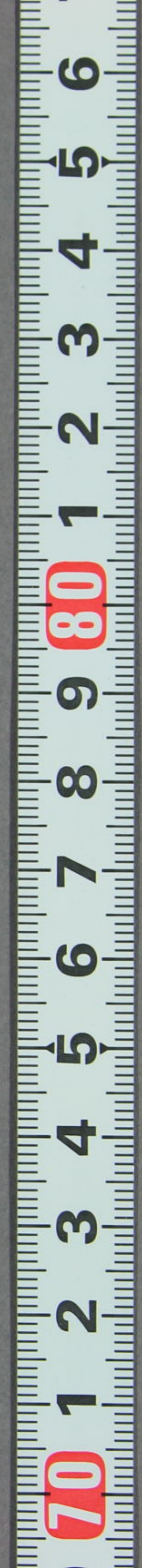




海月集
下





俳諧錦繡綴

晋子ちる巻のさし
 ぬきし錦繡綴は
 下華嚴阿含方等
 ありは法華經を説
 さるは法華經の
 もとを今も亦しる



元禄丁丑冬

江上隱士山松子序



蘇す下したも此こかくこく人ひと々々人ひと 翁おきな
おもおもららやら矢や多たくくるるおお花はなをを 素堂すどう
河か野のやや終しりりひひくくぬぬをを書かき

標ひょう子こはは心こころ守まもり

山やまのの時とき人ひとはは落おるる人ひと白しろ牡うし也なり 平田へいけん 李り由ゆ
押おすすここふふ語ご此こ来きぬぬ目めをを好このむむりり 尾お吟ぎん 西せい吟ぎん
腹はらののつつ人ひとははみみをを人ひと也なり也なり也なり也なり 野の水みづ 野の水みづ
龜かめ此こ背せ也なり 標ひょうのの浮う巢す也なり 肅そく山さん 肅そく山さん

けいけいかかるる我われのの旅たびははくくるる

松まつ鬼おにのの獨ひとりりりくくししやや秋あきのの名なををくくれれ 其その角かく
よよ智ちのの師しはは車くるまをを産うむむ花はなのの思おもいい 嵐あらし雪ゆき

歸かへ二に

車くるまののああるる花はな見みとと乃のくくるる山さん 其その角かく
ちちくくちちののぬぬああんんののつつくくややおお積つりり 嵐あらし蘭らん
紙し唇くちびるやや所ところくくくくくくくくくくくく 柴しば雲うん
海うみををももれれ中なかははゆゆくくくくくくくく 通とほ橋はし 山さん川がわ
尼あま子こののあありりくくくくくくくく 友とも妻つまののくくりり

ちちくくちちののぬぬああんんののつつくくややおお積つりり

花はなををるるここののくくくくくくくくくく 者もの 者もの
志こころはは陰かげくくくくくくくくくく 松まつのの心こころ 翁おきな
ととくくくくくくくくくくくく 章あきらのの心こころ 翁おきな
佛ほとけのの心こころをを視みりりれれぬぬくく 翁おきな
ここのの心こころをを思おもひひくくくく 翁おきな

憶芭蕉翁

有華之沙跡此社跡如く
弥生年とよみゆる 粟 米
身乃巢も次歎の身又ちちりて
こらへへんに蟹の味い
上田を河くくへても苗の法や
あふ先へかき家その脚
蹠の節法おつるかきさ
玉委若御堂き原下地あり
鳥子 出家 三條 の音

其角 溪石 揚水 善船 仙化 角 右水 船化

糸ほまかきけくあたる菊乃木

懸籠のお杖くあたる栲
小坊、まは蕪くお数あさ月の友
町、庭もふかす冬祭の園
うらひく酒屋の庭も涼山人
多あさきと餅種を干ス
ひりくれ十夜のくらと葉川り
甲斐、あさ旅くみを産ム
おのの奇植伝いんは柱柱く
昼時らある意乃是凡物
軒よりは乞食此玄閑人

角 石 水 船 化 角 石 水 船 化 角

苔の下まゝと改めし墓
 よし山佛は僧乃こもく啼く
 層名百首よ春の春此月
 法正の船とといつら已乃後
 おと詠神の物事此月を吹
 揚貴妃の影をつつあるゆら
 癩痘いゝゝ下女々調々
 入く洗ぬ白牙餅の米
 志ハハ寒く雪よあるる
 亭主婦アアア詠かんがゆ
 るるるる馬船あむ音

海四

石 角 化 船 水 石 角 化 船 水 石

麻少をくくふ山あれ部ある
 おろを校折の傳白り谷
 目乃玉の物事はくく貝吹く
 空死しゝ海狐を飛ん
 おろを校折の傳白り谷
 みるまれ口を姥のくまき
 かりけえくくく切艾
 五つ々四つ々おとく鐘
 御神輿又流流乃後此輝
 かのさも影まゆり女
 あひそろつ交びつら此教あり

水 石 角 化 船 水 石 角 化 船 水 石

涌口とめくかゆる湯の層
いそがしく着まうつ所化乃禪掛
色はくはれぬ此の雲の雲
部はくはれぬ此の雲の雲
軒おとら花よこと紫の情也
醉くかゆる梅の下み
春のあ三十川の中とら水
かゆるまらるる庚申乃骨
供多氏崇むる神も所く
碑より世の心なるもの恋塔

編五

化 船 石 角 化 船 石 角 化 船 石 角 化 船

去けたかむりつらちる此岸の心
ぬるようねるい嵐とる。犬
泊きして寝たむむる苞乃肉
扱みたるい酒もつら舟
日盛きいとる考始のそりらるる
細天弁のそ人かゝる敷
銅遠の水手兼製此の心
木乃葉は道林を干らん
夕くに茶入ひてる鼻 臆
吉ふ精熱を待り表をるを
一面は所所の雲は表かりり

化 船 水 石 角 化 船 水 石 角 化

襟りく膝りかゝる。 麦皿
 世間丸は白髪つりつり白結さく
 同一文ニかく伊勢の祓毛
 ちくらの金さのせまる旅電結
 一二三痛の景此よりさ目とめて
 花乃さりりは通る。 小娘
 嘸多つく法師あまめく旅此者
 道祖の神若みる。 陽炎
 鳳^{ホウ}輦^{レン}とさうりて渡る。 大和川
 次なる武者の年を回る

角 水 舩 化 石 角 水 舩 化 石 角

錦六

名月又彼朗詠のしり所
 尾むらりつりく招り病
 旁る水くまま此あまの右左
 土佐の歌仙もさづもさく磔^{ハク}
 佛めて禪とささる。 唐の舟
 祈り水のあまりり食瓜ある
 身療治る心一つをさく。 紅の目ぬみ
 磨く鼻紙と伝ま枝ぬめく
 あまひかゝる。 梨の切口
 當日此位牌くり出る。 月乃終

石 水 舩 化 石 角 水 舩 化 石 角

まはすゝとある所の男が連
ちゝとて平仲り教
あつたりとあるみきあふりし
四度^ヒの仕立セ振るやある
鄙人^ヒ代^ヒ舅^ヒてらゝつひりて
齊^キのう^キ包^キま^キま^キき^キ碎
凡^キ帯^キりら^キは^キと^キ待
級^キの^キある^キ蚊^キも^キつ^キま^キの^キ秋
芋^キの^キ根^キら^キの^キ地^キの^キ巻^キひ^キ
救^キ生^キの^キの^キけ^キある^キひ^キある^キ
昔^キ分の^キ園^キと^キる^キる^キり^キ蔬^キひ^キは^キ

藤麻^キありぬ^キ麦^キ飯^キを^キ賞
何^キと^キな^キ令^キれ^キ人^キや^キ百^キ乃^キ上
あ^キと^キ僧^キ教^キの^キ足^キす^キの^キ濱
秋^キけ^キと^キ糝^キの^キ干^キ物^キな^キる^キ
牛^キの^キか^キら^キ瓜^キと^キく^キ夕^キ月
淋^キと^キる^キ所^キ持^キ現^キの^キ藪^キを^キ色
ち^キら^キと^キ玉^キ餅^キつ^キの^キ白
佛^キ壇^キを^キ不^キ化^キす^キ信^キま^キる^キ却^キ此^キ時
二^キは^キ板^キか^キす^キ入^キあ^キひ

はくくくくかゝのうれえぬ老見ハハケシ知見
朋友トモのこころいふらぬる哀愁アハシはあまら
ゆきくくかんやちけくくく四十シ乃
くくく當ぬる日五午白くくくくは是
を誦經のほ追ツき午ウ傳く傳家ツケなり
尤真マコトの辨ハカとくトクなり

東順傳

芭蕉稿

老人東順を板氏イタノありまらけ祖父江州堅田
乃農士竹氏タケノと稱す板氏イタノのあまは晋子の
母ハハくくくよるまの形カタくくく七午歳シチノかカとせ
の林ハヤシは月ツキは病ヤマトは枕マクラのうウつツく誦ツめて花鳥ハナトリの

情ナリを悲カミめる思オモひ限ハりの床トコはくくくく
神カミくくくくくはくくくくくくくくくくく
大オホ業ノ妙ミチ曲マカれくくくくくくくくくくく
医イハククんくくくの産ウマくくくくくくくく
より俸ホウ給キをくくくく金魚キンギョ籠カゴ塵チリの結ムスくくく
さくくく世ヨ話ワをいイはくくくくくくく
杖ツエ振フリく業ノ成ナすス川カハはくくくくくく
市チ店テンと山ヤマ居イくくくくくくくくく
くくく手テ札シをくくくくくくくくくく
のくくくみ車クルマくくくくくくくくくく
東トウ聖セイくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく

市の人たるは

入月此後を机の四隅の那

行草躰 之十四句

悲悲鳴 獨吟 其角

ちんちんく蝦よそめ。涙のり

並そぬ鶴乃狼のさうなり

春禱とよめ旅人つひらん

杉影一宵紙汁と焼物

乞食めと世を志す家々の月

ゆきとけりうらるの葉のまな

気をつまきく少後濁る秋の昏

世白りあまきりあまの影

我らひき人の肉衣をほめら

湯豆腐のほれさめつ建

あられ冬に鷹やうとおひりり

伏見人の醫師の号どりり

炭者よめ風土記のやう

芋やうくゆる城中の畑

りなま川板になま叫み猿

温泉入の通子山る此月

花の中をむらと調市を拍く

暮あけりさうはかり菜の味

十女日城十里ありく琴ヒトイころ
ま歩りヒキ又七ヒキ又七ヒキ又七ヒキ菴
年のくれも桶は餅を入きて壺
糸をひくびよ息災ぬ母
東國を一夜泊りもたけけあり
松のちね紙有ぬ名あり
吹出し鹿もろくふ笛の音
いよりやうり中ヒトイの酒
病中紙乳母の尼又まきさうり
琴の下ヒキ撫ヒキ何を入らん
ま新てもよふ時あす酒ヒキの鐘

市女りくへ出茶をくりり
水ヒキを車ヒキの流り牛の香
坑ヒキを突きく融ヒキ自ヒキく
巻成ヒキるるあよ面紙おぬん
傘ヒキ少ヒキけく春ヒキ雨
十月廿日羞我花吟
けいふやまこ酒井 夷講 其角
廣沢
池乃流り雨は氷もあここ山 去来
のくみや
木かじり入おの蔭ヒキさしあえ 如生

清く流や流杖さり吹我るる

其角

臨川寺

風乃地まきく落さぬく秋の光

去来

秋の光のちの影よ

口ひらきと楯の音しけり

秋の光のちの影よ

其角

大井里

冬枯のあけを秋そりん妻屋を

去来

のりりり

秋の光のちの影よ

加生

加生の妻の心はひと

燈かゝる紙ありしを人けり此冬

其角

遊上の吟

帆つけ舟ありや堅田此冬けり

は月乃阿多秋尺をよ鳴るる海

曲水

遊園城寺

かゝひらきと井の仁王や冬木を

其角

芭蕉彦田村

去るくもやきと枯木此夕月日

千那は竹く父の音

堅田乃ちへとくひらきと

婆よ老なりかゝるる年や横田乃老

湖を登程くく尺せんじりく之流 尚白
 よ日は初月のけくや村ちる里 其角
 蟹のかるりふ菜たくりやみふあき 素葉
 屋中やまくれ似合ぬふはのうみ
 新月下の七日尚白亭
 園りどくくち待えんく小ふが 尚白
 指うくくまよとまきく火乃節 加生
 茶師の秀揃くくりかき形りて 其角
 次
 越えたりや船路とのく 新の色 全
 ちの程のありく 新かきまらる 白

法く水くむる有り 鐘の洗を水く 生
 亦
 ひく川松くお所より浦の香 全
 鴨く守等を入く此月 角
 鈴はち片京町よる次より 白
 番道の入口は俳諧ふ
 カちき軍かきく入る
 かきく定くるも此 去来
 鴨啼や弓矢を振くく十餘年
 又月くくぬ ちあき名 小刀 嵐雪
 はくくくく 聚焼業の気持く 其角

新粒のすゝる 龜骨車カメボネクルマの月
 みるく手イナゴも遊ウツクく山あり
 盞サツ付くも 露ツキもぬらやる
 うけくも 影カゲえあつたる 是處ココに居る
 まさにも 粒ツブを入いれくも 露ツキ
 旅衣ツツまてとどむれ 出かてま
 田タま多かりし 里サトの麦刈
 誰タレもみも 穢ケガレ立たおく 雨アメは舟
 平家の陣マタと笑わらふ 浦人
 船フネかけてとちりくくの 襦スズメ糸
 畠ハタチの中ナカよすあつる 月ツキもあ
 雪ユキ 角ツノ

いまも無なり取とりぬる 老オシお積ツ
 えうしあれ 遠トホかきし 舞マ
 花ハナを以もて 出です 花ハナ成なり
 花ハナ解とつくと 家イヘ子こよ 昔ムカシも
 荒アラ神カミを 捨すて けさの 年としの 船フネ
 うけ づりか くれ 雲クモれ乃なり 敷し
 よめ 娘むすめん なる 恋こひれ けさの 雪ユキ
 小原コハラ黒くろ木きぞ 才さい成なり けさの
 味あじ原ハラさる けさの けさの 雪ユキ
 雪ユキ 抄しりひて 寺テラ乃なり 入いれ
 八や景けい此こゝ月つきも 雪ユキ 角ツノ

秋のさめてこけいしめりぬかり 来
 持舎りしめりされしる 煙の光
 煙りも我の酒うらうらと見
 とよんといひのたうらに茶とて
 火燧代燃ゆすういあまう
 多形すゝ意れ限うとあまけり
 惜ま水つてもまはへさるる
 形まし賑の方のめとてあま
 長、成、く、く、く、結、の、あ、り、
 花、お、り、と、各、事、成、は、い、ち、の、こ、
 柳、お、り、く、く、く、公、及、給、乃、舟、
 雪、角、雪、来、角、雪

其角述

或師此云利休の茶の湯子あひて事を
 好むともかうぞおれやのたふともを是の
 古し是者新しおと目をとちりてあめあひ
 けまら利休さうく不具まで新古の目さく
 者あさ人おとく河邊を好むともかうを
 くとく欠措^{カサスリ}新^リあつとも時あつてはく茶は湯は
 田あつと利ひのささはるとれさうら公衆へく
 物あつてはほらつと形うとあひとくを御供も
 さのくとく白のたふあつと然いあさ人こ能供も
 くとくあつと其者又あつとたふとく是の長

是の丸珍重かゝる鳥はあそく目利やゆへ
まかまかましくや赤紙のむつりき祈の
席のちあうりき時を更しく分派し
おとく無点此句とも是用之熟者の心を
つらむく句にたのぬきをめらり人の
あやばいあひあひせんか下にから行
たつたて用毎月の境新古此分別
さし高く守るも自然此流あつた
出まれ一向もいつく思ひはつてぬく
さね此茶巾お目のまの茶巾お他
用いさるも時若くはさあかん

舊紙お目のまの茶巾哉 普船
こまあつたおち身がつかへ 其角
まつ年の以ては酒自り
包み紙やる陽産乃と方 船
産印は梅あしあつた月の影 船
ちのこは鑊をさる丸窓 角
あつた色紙の泥れり人 船
魚屋のあつた人の代昌 角
身は似ぬあつた能太ま 船
あつたあつた日豆 角
潮煮も幸くあつた 船の味 船

玉をかくて礼のこりけん
 柄杓も振^{アツ}りしつゝあまを水や
 北神の寝るおんくさくさふ
 市供の人あつちうりあがら
 いふあつちうりの市鳥啼
 月をみよ近は北海のあんざり
 旅代ちあつちうりあがら
 吹くちうりあがらあつちうりあがら
 二日すうりあつちうりあがら
 安持佛くらあつちうりあがら
 常任公所相のかつちうりあがら

角船、角船、角船、角船、角船、角船、角船、角船、角船、角船

目病もども門あつちうりあがら
 りあつちうりあがらあつちうりあがら
 山の井あつちうりあがらあつちうりあがら
 教の白あつちうりあがらあつちうりあがら
 振種代カのあつちうりあがらあつちうりあがら
 是をさあつちうりあがらあつちうりあがら
 波の月波あつちうりあがらあつちうりあがら
 篠^{コシ}あつちうりあがらあつちうりあがら
 稻刈あつちうりあがらあつちうりあがら
 家あつちうりあがらあつちうりあがら
 市人の肩あつちうりあがらあつちうりあがら

角、角船、角船、角船、角船、角船、角船、角船、角船、角船

南風あつて 横雨かゝる 海
嘆き花はほろろく 中 塩 燗
ちこそとらりぬ 鶴冠 雲 海 香
角、船

火神の紀

斤も亦あつて 火神の紀
幸ふの物式とく

其角

忠度と所もかれ 火神の紀
名もききぬわら ちか 代と此
鼎の法をさす 破 鶴まくら 蓋
ぞ我ま似合と 雲とれとく 移
さぬと 筆は此 いとよくりも

ねらうとく 砂よりとく 火神
ぢいといふ けいこもあつて 火
見るとつとく

全

岩とくは 讀のぬけ 火神の紀
鬼女の面を 般のあつて 女とく
古来より 角海をぬりて 黒い煙
緒のほま ねりの合を 傳水 全
一人合此 鬼女のあつて ありあつて
図あ のねらう ぬけとく 源助
よかろ あつて 火神の紀 面式
うとせける 時とく 火神の紀

数くを釘かけたる。紙カミ幣ハタ 遠
 冷ヤ郎の給る甚なうし。角 遠
 振神共如電よりあまる揺らぐ。角 遠
 けりぬ。程を尺八よりけり。角 遠
 折尻き多のさあたる。斤あり。角 遠
 去カ勢ありぬ。越コよりけり。角 遠
 み成呵る人きゆり。此生ぬ。角 遠
 初ハジらきな。さよ意のあ。角 遠
 文車やうの。此もあ。去カ其干。角 遠
 へ海ウミより酒サケの。女禁制。角 遠
 此月ツキれ。へ原ハラけ。ふか。人。角 遠

社ヤシロのカ瀬セの草クサ茂シ地チさる。角
 小コ使シ新ニおオふも遠トきりく守。角
 尺シくぬヌ隈カとも去カ其シふフ育イク。角 遠
 真マコト像ゾウゾウくくククあて垂タラシる。爪ツメ白シロ髪カミ。角 遠
 小コ及ツキのカ力チカラ此コノ新ニみミけり。角 遠
 覺カク範ハシのカ知チりのカ此コノもモ花ハナ此コノ奥ウラ。角 遠
 去カ其シひヒくクりも日ヒ津ツのカ持テ。角 遠
 立タチ春ハル。角 遠
 春ハルも来キぬ南ミナミ北キタ蒼アヲ色イロ星ホシ乃ナリ乃ナリ。角 遠
 風カゼより二ニ日ニのカ月ツキ此コノ吹フクちるの。角 遠
 旅ツツ初ハジメ。角 遠
 露ツキ沾ツク。角 遠
 荷カネ兮ヤ。角 遠

うつくし火れ南波うけやまうりく日

其角

二見の園成おとゆりく

うつくしめぬ花をうりく此まき

翁

明星悟心

家目あき師を八日此方さしり

杉風

水札鳴く秘移さく流きりぬ

尚白

尼のめれ尼まぬる福けんふ

彫棠

次帝さうりく公つ水

まのれお叫よわしり

加生妻

我まぬりけあまきり夜の音

其角奴

妻ささるけあまきりる志ん

是吉

山陰やはけのさるきあけ小あけ 柴草奴 二七

秋れくれ肥さる押こ通りけり 尚白奴 三

美妙れさるん二日くむれ 仙化奴 吼雲

辞世

もえんさく又消やけあわさる 妻妹 千子

小僧さる度子ゆりけり 少年 角上

人さる維子ぬさるる犬の姿 其角

於深川栄事院

はくしあれあ公ゆりや物のは 嵐舌

あきり地り水さる 神叔

初鞋やうりく荷前の宿ぬ 介我

力は舟あり船はきなり
 高き水捨る蘇鉄の塩はかす
 仁にアア公又すなむる人
 とし中より墨はかすぬ 眠
 蓋くくくくくくくくくく
 片くくくくくくくくくく
 造り精神くくくくくく
 半き半き半き半き半き
 くのりき男描けりい書
 まる丸く水衣を切る神の角
 縁づくはあれくくくく物

其角
 雪叔角我叔雪我角雪叔
 雪叔角我叔雪我角雪叔

若くは友聖天町や一のめくん
 淨瑠璃はくくく幕とあるん
 力やま寸切くくく察位在
 周栗り水くく山はくく
 二三俵り接ぎ麦のきありく
 ころくくくくくくく盗人
 大寺北川幅くくくくく丸
 一小屋棲くくくくく松方
 此京成くくくくく海止寺
 めめくく用この骨とくく出
 志くくくくくくく論くくく

角
 我叔角我叔雪我角雪叔
 雪叔角我叔雪我角雪叔

は某垣ういも老の 碎 狂
りいんかとお替とくおの大時
とめははかたぬきもすも式
馬くや帰女よ医もくくもや
狂詩の辨ら格人の月
おのる瓢箪の履かひく
田う痛く鹿おきくうつじ
心敬の赤信去くくくゆけり
赤紫れ芥は寒さえゆる
下市れとくう蹴立る花さか
約の新穂れ鈴たる春風

角我叔雪我角雪叔角我叔

あかききめいれく

角なうて男おりけり鹿の友
はくくくあきあきあき垣
白はくくくあきあきあき
志くく帆おりせ時のは組
水やうくくくあきあきあき
四つれは吹く櫛の秋風
木あきくくくあきあきあき
岸川の流りもくくく送たり
上戸きくくく酒はあきあき

溪石 其角 石、角、石、角

髪を見法師とをうく尻をうき
 多うあそび無しの物此惚の汗
 帳も巻も只偽^{カキ}響^{フキ}の初かくし
 鏡北田踏の初お此夕る
 手考の二百町坂は出^シの^シり
 と^シり^シき^シ神の荒^{モミ}穀と^{カハ}歯
 結さ馬紙花よりせきく^シ信^シき
 何山吹^シ年^シ地下の^シあ^シら^シみ
 汲う^シせ^シく^シい^シと^シ涙^シう^シる^シ古^シの^シあ
 美人お^シ水^シとも^シ寐^シ自^シま^シる^シす
 三世^シお^シ此^シ信^シ者^シと^シら^シれ^シあ^シら^シき^シ

角、石、角、石、角、石、角、石、角

かい^シき^シあ^シく^シ年^シも^シ悔^シん
 糸花や^シく^シ海^シも^シ深^シぬ^シあ^シあ^シい
 ころ^シきは^シ菊^シの^シ松^シ好^シあ^シら^シれ
 生^シ方^シ玉^シか^シ心^シ座^シき^シに^シか^シく^シ向^シり
 感^シ状^シより^シ月^シ此^シか^シく^シあ^シら^シき
 切^シる^シ鳥^シ此^シ樹^シあ^シら^シあ^シ入^シる
 漕^{コギ}り^シ無^シ紙^シ安^シ房^シの^シ摺^シ方
 阿^アま^シく^シと^シ龍^シの^シ尾^シま^シく^シ雨^シ早^シミ
 織^{オリ}の^シ喜^シ此^シい^シく^シ増^シ福
 切^シる^シ五^シ壇^シ長^シ屋^シ此^シ姿^シあ^シら^シき
 今^シお^シあ^シら^シく^シ足^シく^シ海^シく^シ雨

角、石、角、石、角、石、角、石、角

糸物のうしろに窓のちのち
さあさあころろよほりしりあ
阿比虹のまろく免んじむ北山
凡志みまろく送る園あひ

崇 通 山 往

夜もろくあみまろく人
うろろく阿比園あひのあひ
入海浜そろく信るるみまろく
とれ信るる是他郷は阿比
面合まろくまろく

其角

うろろくまろくあひまろく片時も

蕭山

鴨のみまろく雁もろく也
北子卧ス枯れく杉の物目影
屋根萱くけく阿比まろく
阿比まろく阿比泊まろく二か
鯉のこまみ吐く月まろく
浮身をまろくまろく川鳥
まろくまろく阿比相局
うろろくまろくまろく相局
まろくまろく猫の尾をまろく
まろくまろくまろくまろく
うろろくまろくまろく

其角 彫棠 山 角 棠 山 角 山

政所のかゝい琴のりかゝるを
贈りて猶ほさる苗と年の有
冥きくい鞍成休る約むりへ
字色まきとくくへは秋
瑠りさた多身くくり花の春
苜の畑成地まの倦こと
春日新いさうぬぐくは楓おそく
紙子の古さいと南とくせん
うが耐き門のを食もたぬく
此板りく車押やうあ
今や橋ま流ま湖を見さる

棠山角棠山角棠山角棠山角棠

さめあひの髪れさけく風
さぬはあまは負さる倒れさる
くも楊枝をりり一修塔
宴^{サカキ}年^{サカキ}のりぬのふさくは無なる
遊^イ悉^シおく馬年なる裡
養とと考とはいり一月の道
さめあひの毒れあひくくさ
捨るさくくはくくくはくく
ぬくぬくカきよくくくくく
お良^ナ種^ナくくはくく寺の元
つがく素^ナ教^ナのむをさる

山棠山角棠山角棠山角棠山棠

梅柳のつらき花あやう枝打垣
小石もさるる村もはなれり
山角

遊清水寺

人の世やのちのち日若き寺林 其角

布袋の換

大壺涼し襦袢此指のゆ所

錦繡綴上甲

俳諧錦繡綴卷下

裁人を侍

木屐の月見

おもしろけや姨ひしう泣月も友 翁

ひさしよひもまこと文斜井郡の那

歩りぬる翁の白杖

吟

香を焚く機と目も塞りぬす 裁人

夜更山

詠句や松のまへを路く 其角

馬の法おつてもさるる神系北 珍

戀

扇折あよちつらき化粧う那 尚白
終さくしき露のまよかふる白うな 山川
星合や露の出入の秋の香 氷花
のつちの香もま向あそ

早し女中足洗さるう神さよ 其角
物片々うりくさるすこ御や 雨等
一山り待人まよまいたやうりち 尚白
まき掃のあき粉白し嫁り顔 行舟
出代やう解さの雨もくさるう 子ん
文もはくうよまのり 糶 五把 嵐雪

交りり成紫蘊のうゆんうる小梅が 秋
あそりり六條とのれ牡丹う終 許六
春乃野も木此の造のま合セ 佑徳
伏見西蓮も鳥り

寒山の讃

初やまり人のあさうり見舟 其角
空満る恩は門の雪もくを合式
神たつははすまもく翁のまより
中さけはよちのうさうりけれん
第くやまののそもアをん神 去来

のくちのりてん

長嘯の墓もめらるはらうて

翁

それちの瓢公衆んせよ辨教

去来

世の中いれれあえり神々

尚白

おとくを祈り先いりし神叩

其角

翁よ信しく言せぬ話けるは

杜因

教をとりたれ私りわたくの院

八橋

あそめり二十とそ夜半の秋

嵐雪

ちん代袋の四十は足ぬ

千那

河つ念ふは酒債と視ひり

洛通

火痛抱く地をひ膝をかぐはる

洛通

そのまじりあそむるや小

其角

あそむるあそむるあけ酒の泡

嵐雪

あそむるあそむる人のいそ

あそむるあそむるあそむる

あそむるあそむるあそむる

あそむる

下外はほみかりやのやあそむる

巴風

あそむるあそむるあそむる

其角

あそむるあそむるあそむる

あそむるあそむるあそむる

風

あそむるあそむるあそむる

鼻のこゝも紙亦秋本あり 角

小功主の多紙案のれいりす
火赤河の免く紙あり水く
以て張函へ茶履一足むいなる
竹紙目取く日はくられ禪
あまみ。喧嘩をさるるう海さる
社^ギ秤よかきく重き力さる
裏へ色岡寺紙の年たれや
安養界紙舞^{ヒキ}あまき舞
板を踏み此下の紙く紙を
紙を火くく紙のめを

流りもま辛紙ふ出くさるりし
月此のあある白黒の相麻
吹く紙一遍と仰り秋本凡
ま紙ま出まら紙筆入の供
漸少米とまあるま紙り
又くく碎くく紙を紙る紙
紙くく紙白紙を紙る紙
紙持ちくる今の南く人
紙くく紙のま紙を紙り
うつるま紙を紙る紙
恵心佛法のちく紙を紙り

乃ある屍ありのやそも
こころれ越の白山やまも
もの何さかぬ水くくの夢

十二月廿日而奥

おありとて入探を梅つら
ゆきひさしれさの暮れ宿
目りくぬつそり者さくぐく
好感のよちよち紙綴り
夕月たるあさけさかんを脣
出代りさく結る白り

芭蕉
彫棠
其角
黄山
桃隣
銀杏

阿子ちるまぬひりゆる楳の音

看くアアなめお終界の親
足もとに菜種をみく芥乃を
茶盆煮く上と泊瀬の学寮
下張の及板戸をくまらりて
はるく心猫の力成さめあ
しりうや襟み片一込の娘
硯法なとこひや早のり
おれ由窓れくさくさく
こ村のあり成さく
まを山と壺をさく

棠
角
杏
蕉
山
隣
棠
角
蕉
隣
角

野人ときくといふ遠きる 瘦
愚かき和志もな秋乃彦
さるみちの我揚る箱戸極
山多此ワラぬころの志何く
新ありあはるるの合歡の下園
かけむらひ機へる床のいさよぬ
思ひぬあやし昼志夜侍
気色ましく曹洞宗の真かり
焦つらこみよいと子と焼
尺ぬり此まゝの志成るれりり
すさよゆらりり所かかき

棠 杏 山 焦 角 山 杏 隣 棠 角 焦

玲りき星の皎けく夜る此有
わさうさめ此走むよる
松茸此地は路かへ沢山手
さるさひあふま下くよ有
あさるい尚志ありかよかきさる
花の名はくしごこが揚き地
け片は中ではらぬ極の色
こてふの新志誇く之線
八月十八日雨中吟
川つよ揖るあまれ水零の那
ありあふらりりりりり

棠 山 角 杏 蕉 棠 山 隣 仙 化 其 角

寐をいふれ何は寝るもくもくも寝
寝のちうはる屏風あつて
さゆくは割くく尺うは栗薑
あけ入する四立又う菊
月影を板本も成かう心く
あひの草鞋とすけく玉珠
あつたの大眼あつても大はじ
まぬあつて言ふくくかき指
たつてんは花枝もく奥の庭
嵐のなとあさくはむく
世のあつてまは男も出代りて

角水翁角水翁角水翁角水翁

秋子くくはる百姓とくく
あつたは詞もか益を成く
るくくあつて芝肥る原
藁もくく石片へ滑を撰め
くあつても秋年あつてぬ言
あつたあつてつてくく肝
袴くくはるくくあつてもや
秋もくく年玉病のくくわく
いくくく人のあつて医者か
腫れる丸は産卵を送る
あつて柳もくく宗論

角水翁角水翁角水翁角水翁

新竿の旌^{カサ}のりきりくみの風
山^{カサ}越^{カサ}のりきりくみの風
のりきり川^{カサ}蕪^{カサ}の枝葉をかき流
煤^{カサ}もく女^{カサ}道^{カサ}おとく^{カサ} 新
犬箱をさけりさ床の物あけや
揚枝をけりておつる文

水角角角角

甲戌紀行

箱根味あま

杉の上より馬をみるるしゆ^{カサ}穂

秋のや尾上の枝をさるる

其角

つゆのりきりくみの風

三崎旅中佳節

門酒やるる此の菊を打

原回頭

新考やや花をさるる富士山

うつしの山

うし新や馬も餅くらふはの山

小夜中山

石のりきりあまをさるる山

秋葉

合相あまをさるるや秋の山

かゝる子杖を授く新林新林式

三股川

おつ権子おつ権子魁をのりり測の色

十と水深松をく

つりこもちと測るよ

後の月松やさかしく江戸の庭

熱田奉幣

芭蕉翁甲子の流りよい

社大の破小繁地いさか

争いよかしくくくくに渾と

はかしく小社の代を志すし

多も石をすくくくの新と

多なるより石をのりり此

やうくし生くるも目出たれ

も句くすやしくくのれをや

興廢時あり甲戌の今を

造業阿しよよ又免くく

文くや移定移定の軒軒や杉此月

手付川を

おのりき祭主の雲を送りり

内宮

字居此屋よきくく

あつちるるらるるあつち

川より遠くおす

乃の秋や赤子もまの神祇止

御神樂 謹上再拜

たゞや小刺あつちるる葉の香

二尺 船態

岩お上は神風きくふまきくあ

あまきく船態の板とつらあ

宮川の上より酒送りあつちるる

此花と青はあつちるるあつちるる

あつちるるあつちるるあつちるる

伊勢よりあつちるるあつちるる

田丸越し

山細の芋あつちるるあつちるる

川きけあつちるるあつちるる

莫嘆野店無肴核薄酒

堪詰豆莢肥タリと同高築り

句と感は

是あつちるるあつちるるあつちるる

初歌

移ぬるあつちるるあつちるるあつちるる

大和柿とあつちるるあつちるるあつちるる

山麓にありて
ちのこく西平本と伐る者
東よりくも境くはくひの巻
心は底まこくよ寒雲繡石
いふち平思ひくせく

敵の城に寒さよきくはくひ

世尊寺

ちのひふれすくく風くまれ
くも斬とくひな月かくひ
拙もいやくせ

杉段の月見所や九月月尽

和河の滝あり

三ノ尺の石出にわく名時

高世山

卯塔の多きわくふるも祈き月

紀の川くせあり

とく月れちくせあり

き川く弓矢つく船やみの月

玉津崎よりちあり

市あり所よちありわく月

帰里

初より月ありわく月あり

少けおれうらた出たぬ大細
川も美かお流のまお後まほし
まよ走りつまらちかて原そ
とらみあまら

軒^{フナ}の川とらぬらるる細り成

住吉奉納

茅乃も葉成まらるる流まらるる海
十月十一日芭蕉翁お終流す
匡留のまら笑けまらるる人よ
まらと彼流まらるる日まらるる
ゆらゆらまらるる止る

州府代蕉子城の屋を
これの秋風とらるるまらるる

星合れ終やたらを城の先戦ま
節く終る馬屋の初月
十二三あまら雁の数をらるる
起るの倒ま下戸まらるる
川中やあまらぬ自れ流あまらるる
あまらるる魚のゆまらるる
蛇乃押る流まらるる八を藤
あまらるる舟まらるる我猫の墓
中く^舟舟^舟事せんまらるる

普船
其角
李下
舟
下角
舟
下角
下

新向の杉林に下りておきあきとる
の形は色ともみ成たうと
あはらふ化粧の出るる 舊被
狐ごうしうもまお舞のあ然
物と失くつもの酒を面白く
山く移るは良れ浮雲
禮とく月みるる神をん新居も
胸の妨ふむ其方僧正
家言やふ赤り心の大佛
穴井の溝を覗く 赤藁

船下角 船下角 船下角 船下角 船下角

一心助よりあもくは年日此光
船輪は尺くく軽くひひ
浦内よりく心柏トナ槽の文木立
度程の影をうつしかく箱
依程南言と形あくからふ世よ
足談きく形る浅系乃市
ら海きく唯秋は月暮れ香
何きくも君よりくあふ献立
ほ遠のくら比血山伏もゆるは

船下角 船下角 船下角 船下角 船下角

あはれうらうらうと夢を語りける
家の紋縁の涙交はる融けし
さも思ひよと悟る鄙あり
年ふかのうらやんやはるむの陰
片枝きぬけりもささくふ夜
う月映目の拙めく
詠園亭の夕あそび
とひうらうとつ夜吟
桐花も葉も去月れ中も今夕日
峯谷にやうけりあけぬ夕云
入川りぬるぬめは棹ちるめく

下角 船下 角

彫棠
其角

梅枝ぬめ君のありさへ
照月小灯ささく出むつらひ
後を流さぬうら物の影
折かへよ綴よらくある巻さく
月影ささく二階のあそび
あふあふの感入りささくけり
つねあふ境さ指もりささく
つねあふと葉もささくひはり
ささく形うらさ幣の非凡
夢色の象来とやう酒の耐
アラスの枯んよりけさる山

棠、角、棠、角、棠、角、棠、角

菫のつね書成よし経世家其月
蘭千つさ家嵐々々々
南々々々瓶々々々り其の時
僧も法も心も温静舎此拜
小信形よ又建垂はまら其菴
連ぶ所の定中あり玉
杖竹も光るはらま突ある付
石切つてく門の雨落
くわし奥もあつりや清見寺
才子終つて尺也る杉の拙さ
糖カサりて其代志々々人乃凡

棠角棠角棠角棠角棠角棠角

揚屋をかくへくもさるゆらき
新し心算徳をかたけ志の害
狐の尻尾千へつて其月
加茂川よ其勢多流る此都を
誰カ其のささく山系外なき
縁とつとおさゆる石此初ありし
本堂はくくハ初くき念佛
尼ニギ云と杉のくさ向ある女房を
箸ももつら其も其地あり以
教々々々々其も其あり花堂
必ス西年よりあことり一掃

棠角棠角棠角棠角棠角棠角

三子草菴紙とられらる日
押さるるるるるるるるるる

雨此脚日半あゆや夏産る

手桶の蓋年一枚の荷

寂椿よハまれ木槿をうつら

秋よりある京昆布の色

叔摺も早し女あり一月の庭

櫛乃石れ落る家れお

此珠を拾ふる海のちる後

焼山紙ハ方どし白雪

下籠の葉はけく浦之里

押さるるるるるるるるるる

一時き揚屋乃櫛日走り

股立をさるる紙をくむさく

中格とつらおおれおの森

秀乃の白りや茶またる酒

秋れ落り櫛をうつら

鴨此目々々々世の月新

鯉此の籾の何れれをれ柳

芝生をさるるれ小坊主の世

春もや海も暮れれうけり

下着をさるる百支の脱

湖月

素イ

紫紅

其角

イ

月

角

紅

月

イ

角

イ

月

角

イ

月

イ

月

角

守切の女共長さを飛くよう心
 考すべく醒く悟りて、面
 片あつく追待女のまのたまき
 一向宗の南无河弥陀仏
 借素袍あまゆりて姿あやしく
 諸役帯免この標あつく門
 切形名と時よゆゆるおとせ守
 換多紙を以て書きお流流
 十八うすあま多谷あつくむおり
 木曾木つゆゆる月の川
 百姓の流るるおとせの秋

月 角 子 月 角 子 月 角 子 月 角 子

お行次才の人りの世お中
 雨をぬくまはる宿のまはる
 再々々々いり守世二分りて

嘴数子早解るるゆる格うけ式
 散りくくしおとせく書く灯を垂
 系片くく移すよおとせくゆるらん
 蝶のゆり糸紙碎く押ゆる
 美月鹿の額に板をらるるあり
 市狼水くくおとせ汲せ守
 川の流流をぬくく悲しおとせ

閻指 其角 山蜂 指 角 指 角 指 角 指

何れも此の音の二重なり少ゆる
日乃させの蠅の入あるを産後
熟れおろしちをさるる類
けの成うめよくや水よりく
其の舎の務を沖舟へ並
一節にわかき高人のおたじ
了りて此下戸や雪此方の月
面癢乃秋もあまらうと知れさ
さきみの刀帯てこいぬる
濱の目成りやうらるる花の庭
費ふ日なりやうらるる此の

角 指 角 指 角 指 角 指 角 指

春うらへぬひも習はうつ水ん
ゆるを訪し半井の門
孝り成を食の中又去りたり
小簪成砂より出るる月時
送るもくたらしなり下原
四月の腋といふぬらみれさ
燗掃やかまし成けり神はる
小屏風より持の鑿金口
町ろくく踏み成りけく踊んる
梨葡萄のさく白乃雪

指 角 指 角 指 角 指 角 指 角 指

扇此下へありる

蛭こ蛭

あつてやかこはきねと毒の膏

修玉のつまる白山の温泉

まのうぶの楮此軒のまはりて

脱くるやうあめ菫の松明

大校を花登人もあつてけり

巢をりかきりてあつてをた

浅茅う糸やあうひく

晴るる道く高松みち

ゆかちや蚤ちのさか州のち

杉枝らとぬけとまじり

其角
柴栗

角 指 角 指 角 指

荷の扱又卸りつる身かき手信

二つあつて路く砲くまぬる

おけり刀此勢月忠宿

おきさによあ諸代衆く

けつ菊もあけり娘の子

包くをとりけり饅頭の内

雪よつとけり狐佛も紙乞信

和田恩智多り知りあつてん

炭賣れ出るる釘き銀

毛をりあつて活る雄

とねも籠西百つあつてまじり

角 我 栗 角 我 栗 角 我 栗 角 我 栗

うつら乳母たうりぬる傀儡師
 ね基きうらうら復の拍敵
 焼く糸糸値の傳よまげままひ
 蔭成とくまきく崩出るのみ
 僧き皆耳を寒く於山お詠し
 粉河の鞠おりあるなり
 勝りちよ卯の目利あつらん
 碎へいちかしの片うき能城
 登みんと階を搦し月老影
 滑くくまきくこれあまをくあけ
 惟ありやうきくゆる秋のらま

角 泣 吟 角 泣 吟 角 泣 吟 角 泣 吟

初 齋 寺 隠 所 も あり といふ 以 たり
 精 戸 的 ぬら 夕 庭 香 菊
 曲 ち ち ち ち 月 に ち 船 を 呼 ぶ せ ち
 粉 花 と ち ち ち ち け ち ち ち

寒 玉 挂 花 紫 取 秋 之

角 泣 吟 角 泣 吟 角 泣 吟

笠の影の眠るるにる林一
 功者お基命し吐ち友
 もぬあそくおつるさる酒の垢
 狂我ふく一日うらり此紅
 四十九の終此片を玉玉指等
 海きりりふの爵と恋病
 こりくお球ねる古ま清なりり
 冬湯ととつとあそくふ新
 あ後と状あそくはるあめ移
 尾流も伴せも十ふの作
 山柿の門よあそらんけあの月
 其角
 玉花角色
 玉花角色
 玉花角色
 玉花角色

音よまきつりく一葉の草垢
 打ち張りつりく草とくぬ包こ流
 四條く賞と此ま此杖
 彼屋中あそく泪のあそ移り
 娘手笑のあそく
 米搗乃ちんまきくこいも
 造あそくんあそく
 雨蛙芭蕉手あそくこりり
 六月やあそく玉あそく山
 應くやあそく敲くや音の門
 其角
 芭蕉
 去来
 玉花角色
 玉花角色
 玉花角色
 玉花角色

相性体力作因縁果

舍利講ありて作りしに十如是乃
ちり瓜思ひよをえてこのころり
サのつら瓜拾ひ出伝家

稲妻や思ひぬのを結るも

新さくつはなぬとも併ふ

鬼灯のかくさくつや燈のけ

まへらどに代まひみよ方おの

秋の田やちかりおとく律二儀

ろよある筆かおのそくらる

山伏の燈く方よ入るけり

つら山つらひらん栗花から

其角

由之

角

尚白

去来

蕭山

角

報

本末究竟等

うゝ孫はけりぬよ山成其崩は

内秘菩薩行

夕まきやあふぬくしつは海も

同講のかと

新月やソリ瓜昔も男山

杉島おの脚の鏡

力花伝あはの柱氏もその那

蛙のくくはると入る声

素堂

戦竹

千那

角

露沾

芭蕉

多う終く猿の齒白く峯此月 其角
 塩鯛の齒益も多し魚の店 芭蕉
 是く我をぬ月とらつるよ山猿^キ山月落
 少他りあせる物とて巴峽の猿よよとく
 峯乃月とやするあり流衣^ウ色し作り詩の
 餘情ともしつたくや此り或公のくあり
 培網の齒らしさ出さるも流くや思ひより
 らるらん寒零の形よくつれく素の果^キ平
 乃く^シも^シ垂^ルの^ハつ^ク五^ツ又^チやと魚^ノ店^トし^れ
 老く^シ活^シの^ハぬ^レを^シり^キ其^ハ深^ク多^クを^シ
 甚^クも^シ也^ハ始^メあ^リて^ハく^ハ知^ルん^ハ 吾^ハ其^ハ角^ト述^ス

用月乃水たえす^ハて^ハ志^スも^ハ此^ハ形^ト向^キあ^リす
 老^シ終^ルの^ハ風^トも^ハく^ハ終^ルひ^ラあ^つく^ハ道^ヲ入^リて^ハ
 此^ハ初^メの^ハり^トも^ハく^ハあ^つか^つて^ハあ^リ時^ノ人^ノあ^リて
 今^ヤも^ハ此^ハ形^トを^シか^つり^キ此^ハ形^トの^ハ物^ノか^つら
 ある^ハか^つも^ハ水^ノ月^ノの^ハ又^ハ若^クけ^をな^すに^ハこ^の
 ある^ハ老^シ上^ノ代^ヲり^キや^すく^ハす^ハ形^トは^ハなる^ハあ^リは^ハ
 た^らに^ハ老^シよ^クを^シの^ハい^ひひ^ひと^ハ情^トなる^ハを^シや
 古^ク人^ノい^つる^ハ半^ヲあり^キ景^ノの中^ニも^ハ情^をぬ^くい^はか^つ
 欽^クも^ハく^ハ穿^キ花^ト蛟^ト蝶^ト深^ク深^ク見^ル點^ト水^ト蜻^ト蜓^ト欽^ク
 飛^ルこれ^ハこ^のか^つも^ハろ^のい^はを^シぬ^くれ^ハ老^シ杜^ノ

その他國もありてやまゝぬんやあつと
系舟中に情をあらむもたれやまゝいふかく
るまゝ又さうし中あり結や哥々さうり乃
繪をりと野渡無入船自横舟存あるあつら
徳山やれたつひあつし船を思くもれいもろ
あーの地を端めよう一燈をこしれ志し移さうし
て方寸を千、千、千、千もたれありあつた
たつと女を笑さうめいりなれ花をあらわし
そとれよ時の花まつり花あり時の志さう
あまよたつあまに回し一燈の志いあまのり書
とあまよ乃んあつし一人これ時の志い

けりやまゝ終の志れいあつたさうりあつた
人乃師いもれは決つたさうあつた他乃
このむ所よ志さういゝ色をさうししとせさう
するれんあつた人のいゝあつた又さう書
若かりあつた中あり徳の浮葉れ時さうし
に志つしそん彼よままれさうしとくゆいさう
さうをたつへしとれり余笑ひくこわさうけ
かあつひりさうれんもたれさうあつた所意楚
國をわすれさうやとれつしとさうさうれい
このさうさうれりあつたあつたあつたあつた
ろよ辨をつるやまゝあつたあつたあつたあつた

先くの饒々より春日の那
 蓬菜平見這かた目出さよ
 相む間も花をさすする朝日式
 鶯や難考るる里つき
 ねもろの春みかた日私式
 物と我これとてなうし初日式
 日若春をさすうに鶴の歩式
 草おろく薺うつ人時とをん
 松とろく七種をやすありし式
 総角の手にて手籠や薺つと
 野馬 如泥 山川 其角 觀水 千春 尚白 魚兒 山店 泊蓬

遊大音寺

梅の香やと食のあも乃づか
 峯の梅松をさすうし詠うれ
 梅の花義経がうし安うか
 其角 文鱗 曲水

老慵

蛸うりの海吾をそ老の賣もせ
 落乃とらうほくもく人の詠かれ
 古草や新草さすうし土筆
 よくみ社も薺花さく垣ひく
 春のまきく川邊志さく根芥式
 路くの束のそもち家松菜うれ
 玉ほと乃総平あはる。松葉式
 芭蕉 嵐雪 文鱗 芭蕉 冬市 泊德 全峯

つゆくと城壁にたる文蔵フシのな

由之

春行

昼乃鐘第未きゆる露の乳
去りくともあたらぬお城式
白浪を此越ふまじ片帆の乳
村の鶴つくとに足あるかき
巻付くカケ簀をほくおのり
寒食乃烟さされぬくすか
同遊とかいよに詣けるは海乃
日の波を翻あつた武蔵の月
といつまうとせんといふ

仙化 治蓬 紋水 巴風 野馬 青西

松陰や旭乃ありしは中なる海
海をうけ舟屋に迫る船自式
浦にや鶴の母も曇るは白糸
かゝりて矢
巢のふえり帯イく入り村雀
板久の一板うらまふもあつて
滝月みよこも捨ぬ情う那
中山の塔をたもやわく
廣さ野乃塔みよとくや森ひより
宥かじんまをたろす信ひよる
旅行こゝろしし水水をを持持く

不ト 峽水 扇雲 不ト 琴風

のしけや鶴乃飛込鬢かみ
半残
巢まより母をたゆむ雀うれ
舟竹
すゝまゝに肌ちつうき娘うな
三園
雀子やありり障子れ母の教
其角

結廬在人境

夕日影町中^{ナカ}に飛こころめ式
全
くわくくーまこれうぬめ小蝶は
曾良

世まつるもの雨ちかぬ年

肩^カ縮をやすむ蝶の福あり式
巴風
青柳よいよく睡るころあうれ
嵐蘭
ゆすりに目をまつまぬる柳式
衛門

身をあげく思立おめ柳うれ
魚兒
曲ま向をちけくまかぬ柳式
其角
柳よの鼓もくくう歌まうれ
司

ねもりすつてくたつを蹴らぬる猫あり

妻もやと^いんく内野猫うれ
魚兒
哺を分家孤^こ鬱乃あうれ
観水

春晴

海つゝさる虹^にをけいゝる鬱うれ
其角

重三

不^ウ羞女乃雛かいつくろあうれ
嵐雪
雛こゝぬかも女い位れあうれ
孤屋

小式部ウも世を離乃小神ウな
所ノ顔ヲかき桃乃宴
もカや離ヲあしク小盞

紋水
舉白
其角

世ヲ酒ヲり人ノ姪ノ雛

其角

草庵

花乃雪ヲ上ノ花乃浅草ノ花
鶴の巢もみツ花の紫ノ式
本ノ花のノ式

芭蕉
同
風虎

獨ニ物ヲもノ花ノ山

文鱗

花折レと君ノ意ヲいハせん
さラくニ基ヲけテ花ノ人ノ
何半ニ人走向ん花ノかり
花ノ人ノ花ノ影ノ人ノ花ノ
乃ハ花ノ影ノ人ノ花ノ

舉白
仙化
安重
中ノ之
巴風
魚兒

花盛ルもノをノあり

七人
萩露

詠唯一心

妻ノ人ノ花ノ人ノ花ノ

觀水
破笠

ふと年乃花よのろぬ小袖うれ
花をゆて人平懐く産子式
湊靈屋ハさう入あひ乃花盛
あつたうや飛あつりぬる花の山
さよあつぬ憂世男乃憎そ共
花のふと母よはさうあつる児
其角

日々醉如泥

花持く市乃礫子あつるん

同

睿興

川乃く 鱧流る 片々くう那
黄精あつ峡乃日の影

露沾

其角

山を同童衣冠を去りあして
壁乃の間屋に残る白雪
月凍て破乃槌のつあつや
人き風ひく袖えあつる
初秋半意をてぬ身成
葦葉落く小舟あつるへりり
樓おろりぬる曉乃雁
靴うつ田中の月花悲しくて
俺くさする僧の振袖
思ひほり揚りくぬ国原く
沾徳
露荷
嵐雪
鹿谷
角
沾
荷
佳
谷
雪
沾

三多の浴にて夏を忘ル、
 我鞍子蝉のともなる乃すう
 砂吹上は垣乃松丸
 燭よりくむすか〜こははの浦
 小乃は生ある光〜うま
 濃墨の蝶もたうあさ羽をほほ
 氷を涌次遠生乃窓
 うれさきとある紙子さき
 東子あくもま〜意れ奥
 常陸なる板久まある小友
 笑子懼て河む江の鮎

角 徳 荷 雪 谷 角 佐 荷 谷 雪

杉並み石の香居乃誇り
 風夜く〜寒笛を吹
 暮りける月元の旅を荒らり
 御廟の傍土り杖あけし
 角切〜裾を放と鹿乃多
 群子食〜く籠乃陸
 山ねろ〜笈を並てあき見
 咎賞ふよる遠き人〜
 雪の四月を休半塩焼
 萬葉よよる水〜むの名所式

角 徳 荷 雪 谷 角 佐 荷 谷 雪

霞のあけぬと又岩城山雪

日當午

川流くそりまろひ落る楢式
朝瀆徳平つたさささるく
日はくわやわねく尺内山楢
雨ら秋く地身ぬ山んさく指
一すーにきふんかすけく式
炭くわもひく人楢のある一丸
野水

二葉の山ぬき一帯

あまきくくとうのひく山楢
沢風

ちんくく酔のさめる夕さくく
ゆきわくくくくくくくくく
銭士乃集く山んさく楢うな
禁札の名さくり寺乃さくく式
石竈よさくくくくくくく
空誅人平くくくくくくく
さくくくくくくくくくくく
抱けく指をのくくくくく式
魚兒

剗髪

あけり乃水さめくくくく式
荷兮

勢田春望

山さくく身をほろふれ於ふく那

其角

仁味夫

電の中よりおどりさくらさくら

全

誰誰幸おぼさるる夜のまじり人

秋風

釣臺

舟季人洲濱う後の夕日うな

泊蓬

山の鯨鯨銚銚うく端端う那

冬市

山吹をひさしる蝶蝶れうのねん

濁子

空う空ううあさあさううあまあまうう

羽笠

やうやうううにに女女おおははままううははししうう

尚白

ああららままのの身身ををおおかかののややははししとと愛

治荷

籠籠山山をを散散守守ののままうう空空つつ

宇齊

咲咲ききててららのの人人ももああつつてていいちち

破笠

木蓮華木蓮華始始めめのの終終りりやや池池ののまままま

文鱗

慈慈くくししんんひひまままま干干くくのの門門

三園

ままももももやや山山吹吹くく餅餅者者

素堂

春朝

葎葎ああけけててくくらら買買ひひ終終ままここるる

嵐雪

才女畫

午午の時の時おおほほつつくくああららやや茶茶摘摘致致

牧足

春夜

多そうれ乃端おしひるけし式 其角

叫養を話ける比

永き日も轉多しぬとより式 芭蕉

原中や物中つるは雪草 同

と穿しけりて吹くもゆる

啼くも凡し流るゝひたり式 狐屋

鳥帽子を垂け搦一切 野馬

山を焼く多の寒く御釜巻く 其角

光けりとも細り入魚 屋

水多や礎のうけ乃安のゝ魚 馬

推流くもゆめも乃松 角

禪僧乃赤裸なる涼く 屋

李白の慕海蓋乃 数

俳諧の誠かこゝん草向く 角

雪乃乃カト竹折ル音 屋

桎梏や猪渡る乃中けり 角

男乃乃初めぬ女乃乃 角

子ぬくを盗入るも立さる 屋

々々たつさるかふる 髻 屋

血乃涙石の如筆乃朱をばて 角

奥の枝折枝折る 菫 屋

降るもむらあはれ音ス 屋

名
 月夜の雉子乃やろくし
 せきこいそ 鎌倉ありく 休蓮山
 唯き遠きよりり 秋を
 物らのぬ薬にもあき 三日月色州
 多智ろくちより 角入てよりり
 親い鬼子ハ口母しき 藁虫と
 おろけとくし 人月の女月
 唐櫃乃きとぬ 扇の吹あひき
 四手槽入ルあり 門乃申
 うら残す波の字 湯の雪白し
 葉すくおろく 際目此玄
 角 角 角 角 角 角 角 角

珠敷川のあより 膝し 寺尼て 角
 あき 糸物乃とく 祈りる 角
 被さるの おを犬のともむしん 角
 うら ちりし ちりる 敷乃切るき 角
 五月雨塗さ け花よ 管さきせく 馬
 海乃夕を 大陣さひし 角
 思ふ印と 物笑りし ちの隅 角
 泣くく 摘ぬる 麦食乃友 角

續虛業

夏之部

夜錦集

伏見西宮吉北地花子詣ゆり

本尊^{キス}牛^{キス}油^{キス}け^{キス}と^{キス}左^{キス}柳^{キス}と^{キス}左^{キス}次

蜀^{キス}魂^{キス}里^{キス}に^{キス}背^{キス}を^{キス}する^{キス}言^{キス}根^{キス}式

郭^{キス}公^{キス}ち^{キス}を^{キス}く^{キス}苑^{キス}了^{キス}際^{キス}ハ^{キス}

冷^{キス}舟^{キス}や^{キス}犬^{キス}も^{キス}か^{キス}き^{キス}ほ^{キス}と^{キス}き^{キス}守

杜^{キス}能^{キス}越^{キス}を^{キス}後^{キス}立^{キス}亭^{キス}や^{キス}し^{キス}人

書を供^{キス}と^{キス}旅^{キス}を^{キス}け^{キス}る^{キス}人^{キス}よ

言^{キス}此^{キス}間^{キス}妹^{キス}よ^{キス}ひ^{キス}と^{キス}セ^{キス}ほ^{キス}と^{キス}き^{キス}を

時^{キス}鳥^{キス}一^{キス}亭^{キス}中^{キス}に^{キス}る^{キス}路^{キス}乃^{キス}都^{キス}

意翔

暮角

芭蕉

其角

枳風

其角

杉風

侍乳山三句

舟^{キス}場^{キス}を^{キス}う^{キス}く^{キス}来^{キス}ぬ^{キス}る^{キス}か^{キス}と^{キス}き^{キス}似

衣^{キス}く^{キス}う^{キス}き^{キス}け^{キス}織^{キス}多^{キス}う^{キス}太^{キス}鼓^{キス}子^{キス}紙

ほ^{キス}と^{キス}お^{キス}吹^{キス}麦^{キス}搗^{キス}印^{キス}中^{キス}後^{キス}う^{キス}け^{キス}

蚊^{キス}足^{キス}中^{キス}を^{キス}め^{キス}れ^{キス}と

郭^{キス}公^{キス}凌^{キス}つ^{キス}く^{キス}白^{キス}ふ^{キス}く^{キス}け^{キス}て

多^{キス}き^{キス}う^{キス}水^{キス}後^{キス}る^{キス}青^{キス}後^{キス}を^{キス}乃^{キス}を^{キス}

川^{キス}風^{キス}や^{キス}衣^{キス}干^{キス}す^{キス}揖^{キス}み^{キス}持^{キス}と^{キス}く^{キス}人

樽^{キス}成^{キス}つ^{キス}く^{キス}多^{キス}皆^{キス}童^{キス}形^{キス}り

初^{キス}秋^{キス}乃^{キス}潤^{キス}と^{キス}り^{キス}き^{キス}く^{キス}月^{キス}お^{キス}れ^{キス}や

扇^{キス}後^{キス}日^{キス}記^{キス}を^{キス}捨^{キス}る^{キス}圓^{キス}の^{キス}戸^{キス}

如泥

其角

蚊足

其角

蚊足

同

同

角

萩のゆゑ所乃土哉 包く坊 足
僧と咄く 皆静ぬる 角
瓦工おろくといく 入相平 足
神鳴つる 詠く 角
おろくの狂惑つる 命哉 足
鳥原近き 吾草の庵 角
惡啼ある ぬらん ぬらん 足
お髪惜む 月もく 足
江多病の亭の 蠟燭白く 足
る ぬ信 ぬる ぬ田の 秋風 角
お盛梟おく ぬ首 ぬ足 足

勇士の土産は 梅を折 角
美女乃 融日長け 暮安 同
契めし 奥乃 繪を書 足
或は 住吉次 遣され 角
乞食年 馴る 安き世 足
町々 二 茶籠 責 角
夜多 飛田の 狐く けり 足
高灯籠 枝乃 推 角
暁 稻花さく 湖乃 隈 足
蜻蛉乃 一かき 流内 足
隣おへて 撥の 糊 足

通りぬる冬の驛乃夕あり
降りしきふる雪の玉味香
金かひよ松の扉城あけし
及故る後ゆゑ閑か倫が
顔あまゝ都の友れあつて
豆々の数も人よ笑ひま
世中乃をよ駝のよらなひて
寺よりちきにあまふ春の日

妻在閨 十八句
眉帯乃露うつ鑿子乃白う乳
巴風

螢消よと帳の裾とく
おとのぬ二つは碁笥に枕して
袖口寒く燵に炭を次
旅人の袂よび音ま夕月夜
かちりを生んる神のあ
隠家や故垣もさむ秋涼
傘持志まゝ君の名を問
滝見して乱る髪のあまやうふ
山鳥うつすかろ乃 壺
花の宿獨り才そひりて
麩汁月上下き影じのま

仙化 風 化 角 化 角 化 角 化 角 化 角 化 角 化 角

殊更カ子カ為雪カかゝるカ門カかきり
 道心カみかく志カは深カ意カもくま
 一鞭カ子カ数カ行カ牛カの月カをカ乾カ
 薄カくカりカ油カくカ遠カ山カの腰カ
 宵カ月カ八カ日カ母カ乃カ之カ向カりカけカるカ
 方カはカとりカるカ衣カくカるカ又カ卯カ月カ式カ
 初カ七カのカ扱カいカのカ糸カをカりカにカ
 夢カよカ生カるカ母カをカかカくカすカのカ郭カ云カ
 五七カのカ日カ追カ善カ會カ

卯カもカ母カはカ又カ霜カをカ流カしカきカ
 香カ滑カのカこカるカみカしカるカ夜カのカ夢カ
 夕カくカのカ雪カはカ尺カにカりカりカ月カ澄カくカ
 各カ悼カ
 卯カもカ目カのカ瞳カ和カぬカ日カ数カりカ乳カ
 故カのカあカとカ我カれカをカ出カさカ別カ哉カ
 眉カをカくカるカ手カ向カらカかカきカひカたカるカ
 物カあカまカをカもカのカ淋カやカ夜カ未カ立カ
 啼カ入カるカ音カもカ形カしカるカ我カのカ時カもカ
 夏カ草カにカ活カるカもカ枯カきカたカるカ式カ
 蚊カ遣カ平カのカいカはカるカ香カくカ悔カえカ式カ

芭蕉
 其角
 嵐雪
 露沾
 扱風
 治徳
 舉白
 嵐雪
 蚊足
 去來

生都や友系うよき風の音
野馬
塚子のまともいうつむく洞ほらの乳
全峰
卒とくもの志ほるにやまき被式
魚兒

うさぬのゆえよみたるおと響おとくや
其角

そ乃多子おと戯あそル

下部等に響く守家日や佛
嵐雪

端午三十七日はあつたけれど

赤飲うまうまむわく金く那
其角

何ちやこもおと響おと乃おとやおとりおとな
紋水

急き起ておと響おとかおとうおとるおと日向おとは
魚兒

若わかしわかやわか響おとさおとのおと目めはめ凡た乃た者者
枳風

懺せんのせんぬぬ妹いくくりりききささ介け面めくく乳ら
彫棠

るる子こ乃の侍侍法法一一花花響響
仙化

白しろ女め子こ引ひももとととと侍侍夕ゆ久く乳ら
魚兒

花はな苺いちご子こやや棘いばら二にまま此こ垣かきの中なか
治蓬

木村

翁おきなよよ升のぼりりとと奥おくまま犬いぬああくくん
其角

簀すいややかりかり霞あせのの衣え乃の隅ぐもりり
嵐雪

自詠

髪かみををくくるる容よう顔がん套た一一五月ご五ご
芭蕉

雪ゆきををくくるる二に日ひ月げつ輝かびび五ご月げつ式しき
去來

さみみ水や清みわら侍水の徑 沾徳
 ちりし此よあけく曇る月鏡の 巖翁
 雲瀧を園乃はかこり白丁花 巴風
 發雲に娘を乃せの家田植う乳 吼雲
 合母さくく友とあつへき田植う乳 其角
 母乃新物くく田植の女う那 野馬
 夕景や楊よ着する早苗笠 冬市
 雨の月此早苗に休き 燧う乳 由う
 暑さ日此やりを乞く
 入およ田宮乃ひくく里とそん 觀水
 ちれあくく男をかり此田植が 不ト

都乃ん小桶よ勤 ち乳ヶはくく 高政
 あをのくす水鏡を老を敲り 濁子
 鏡和もむすほきり粉繩う乳 玖也
 月々入我等も 出る粉ふが 風虎
 甲斐山中
 山麓乃ねとぐい閉るむくく式 芭蕉
 古寺や僧がまけんうす桜桐のほ 三園
 むくさみみのもとにんく 自準
 世をとへえ安く茂さる 櫻う乳
 田家
 むましくて曇るさくく夜此月 枳風

はらわれさす放さぬほろり
蚊や火の煤けく途るほろり
滑うのく芦あうらるる螢の那
君起よ人しつまりて螢人
蛇乃衣年 残る故を式
木俵へおかりそ

山里乃蚊者昼中に喰ひあり
かやり来と西の乃とあ夕之那
おちの人淋寐うゆの 枕蚊屋
旅のく香わらさる此故を式
おあうや吹おと たる蚊乃春
去來 綾戸 去來
ト十

啞蟬乃鳴ぬ梢色あり我也
志濯の袖手 蝶鳴夕日う乳
土まゝさけろてる日あも

蠶追平 妹忘れぬや爪作り
かく成ぬお山里乃爪の未
肉喰子松陰せたる日なご式

復此日の入あいつくま 雀う乳
あ川の日よ杖まつほす 汐場式
誦錢神論

一文乃残いさあや夜の水
綴越えて亦くらしもとる 清み式
蚊足 嵐水

魚兒

溪石

野馬

孤屋

觀水

去來

黄吻

綾戸

去來

杉風

杜國

其角

翠紅

李下

欺心

好柳

合歡木乃睡りてぬるまはばあは 仙化
さし我蠲^{カニ}足るるのほるゝあは 芭蕉

さうまは竹まりにさうりて
山林のやうりもさめけるま
市原ちあうり

陰よかけ小燈の小町も 蟬此空 千春
虫をむと 擗^サあは小町ほされりわ 其角

九折^{ツラサカ}のほりあふる時
山鳥もさうと見園の木まう乳 千春
倦しうに貝ゆく俤とかんこ鳥 其角

隣家よ樹をさうり人あ
う北四時先ほをさ
うさうりあさうり

何りゆらん六月桐を 極る人 同

蠟^{ロウ}をさうりて生死を軽くせん 幻叶
心法其精口耳粗^チ

納涼

時分ハより土用初乃 亦抱山 其角
少り希と朝起晝寐夕すみ

落得閑^ラ

世をさうりて過ぎ法さく涼に哉 文鱗
八のろ我ほめり 樽借るすゝみ式 李下
樽くふる樽喜もすむ夕々那 冬市

宿二尊院

涼心あや愛宕よとも似火此り来
更るあを隣よ数みすくみり
涼一さや雷をきき夕向昏
埴竈やれのう飛乃うう涼
響あうう祭此海をを涼り
観氷 去來 冬栢 由之 鹿谷

奥羽黒塚あり

はみりや鬼ももも夕すく
維舟

源義経平家追討の時

上流に鐘をさうりけるるる

あふりれ石をゆんたれ夕すくみ
同

逐涼二句

涼一さやはん武花野我うくひ星
其角
園乃あやすむ園乃きをか
文鱗

雨後

つちたぐ水ものひう池蓮り
野馬
蓮うもく師の園加包清水式
ト千
尺くね麻州まはくろくか
全峰
昼初年くもる橋乃日陰式
且只
ひる月の花まほくもあつ式
破笠
むるか月や猫乃糸目なるむ
其角
山やたむ胡瓜乃花の寄
濁子

江州まきりて回郷

干^シ飄を右刀の終山そ劫へき
法^ク々々や日陰もやうる角豆垣
一^ハ花^ハ不^レ筋あるさけけ
自悦 鉤雪 虚谷

卍菴の巻

夕^ニ立^ルふ彭^流一^キるる乞^合哉
夕^ニ立^ルや神^春一^キるるわ^ク一^ク一^ク一^ク
夕^ニ立^ルふ雪^あら^くく^く唱^春く^く乳
夕^ニ立^ルふ^カ筆^子干^ス粉^其去^く一^ク一^ク
夕^ニ立^ルふ^カ度^安尺^く一^ク一^ク一^ク一^ク
巴風 仙化 其角 僧宗泐 治蓬

午契

病^ム人^をね^むひ^やく^く士^用乳
蚊足

錯^目々^々く^くく^くく^くく^く人^士用^干
去^來

或^人所^持の^人き^く一^ク
其^角

何^もの^一我^カ頭^地ぬ^くろ^ろ一^ク一^ク一^ク
澤庵

漢 虚栗

秋之部

日よるぬるやよりの北男七夕
天川ありも牧屋のゆきあり
星合や瞽女も形人の糸とらん
槿を星にわらぬるわらわら
雲計や船引とらん五の川
大内此わらわらねまん星まつり
星合やわらわらまつり 猶かさん
七夕よかぬぬ旅の杯は哉

旅思

風虎
自悦
嵐雪
槿花
綾戸
千子
壽閑
由之

星合や女乃もまつり 奇ハ刀人

贈 槿花堂

其角

藤曲ル 念ひ乃一ツウれ
藤や壁乃日影のくまに
藤ハ二人ちかえりあはれ哉

露沾

牧足

杉風

驚夜雷

よに晴く 藤 雷 千 潔

其角

寄 李下

いぢつま我手にとも 園紙燭哉
いぢつまや紫山字のあゆむ川向
いぢつまやわらわら 菟の望まらけ

芭蕉

岩泉

湖風

いづれまた目をそらねては雲霧の
魚兒

遊女とていふ方ありけるを
いづれも久しくあひまかり
ある人まや侍る

露^{ツミ}烟^{ケリ}は世乃^ヨ外の方^{ウチ}うけは
去来

父母乃^{チチハハ}新^{アタラ}灯^{トウ}籠^{カゴ}ゆき光^{ヒカリ}は
由之

おさ^サ人の教^{シヨウ}を学^{マナ}かたにた^タり
全峰

あ^ア魂^{タマ}乃^ノあ^ア粟^{アヲ}々^々の^ノ氣^キは
文挑

就^{ツキ}喜^キ者^{モノ}を^シに^シづく^ルに^シ衣^イ

女^メ餓^ガ鬼^キす^ス盆^{ボン}舎^{シャ}は^ハ魚^{イサ}や^ヤ法^{ホウ}の^ノ石^{イシ}
文鱗

盆^{ボン}屋^ヤの^ノ秋^{アキ}の^ノ門^{カド}乃^ノ灯^{トウ}籠^{カゴ}は
嵐雪

貧^{ヒナシ}

魂^{タマ}や^ヤ人^{ヒト}祭^{マツル}の^ノぬ^ヌ宿^{ヤド}の^ノ取^{トル}足^{タラシ}
牧足

對^{ツキ}愁^{スミ}

さ^サれ^レの^ノ人^{ヒト}や^ヤ隣^{トナリ}乃^ノ玉^{タマ}糸^{イト}
其角

あ^アま^マの^ノ門^{カド}乃^ノ乞^{ヒケ}食^ケの^ノ親^{オヤ}人^{ヒト}
同

送^{オウ}火^カの^ノ山^{ヤマ}の^ノあ^アれ^レの^ノあ^アれ^レの^ノあ^アれ^レ
觀水

朝^{アサ}つ^ツ人^{ヒト}浦^{ウラ}の^ノあ^アれ^レの^ノあ^アれ^レ
苔翠

志^シ坂^{サカ}の^ノ花^{ハナ}室^{ムロ}の^ノあ^アれ^レ

あ^アれ^レの^ノあ^アれ^レの^ノあ^アれ^レの^ノあ^アれ^レ
自悦

輝^{ヒカ}子^コよ^ヨあ^アれ^レの^ノあ^アれ^レの^ノあ^アれ^レ
去來

盲^{メクラ}目^メ毛^{モウ}艇^{テイ}の^ノあ^アれ^レの^ノあ^アれ^レ
春雷

吹うせき江乃一隈や水と勢
とせ約て多るもあぬ小ふく乳
春雷 苔翠

禪師のまじり

おきつれらるものれ一 如帝花
文鱗

遊女の酒もりける

ゆきや恋の乳のかみ萩かじん
同

女帝のまじり花乃花形る
景道

下園をまじりゆき比乃一葉式
冬拍

常陸へ南り

牽舟のあまた起る 極芦式
全峰

花の秋草よらひあく 掬る式
曾子

萩系や一帯のせ 山乃犬
芭蕉

旅宿

木樽酒花見ぢうに寐入り
観水

入湯乃比

夕萩のはちる 凡くは湯形式
紋水

木罌山中

秋を於すくはる 萩を 鼓ノ雨
舉白

禪寺のまじり 寄ある 山詠式
同

山吹く 萩の 秋乃一 水式
紋水

元去来の世

伊勢へ詣ける 乃守り
初詣のこころ

伊勢をのりよれ及つれとくおの丁
柴もあれあちかぬるうらられ
うけらふの友をよき切おれらむ
同 千子
沾荷

聽聞
簾中れををすよよ木よ坪の庵
芭蕉

何もまもなり縮ららりて冬虫哉
嵐雪

ひのひともにとる草乃一つ子
治蓬

聖護院の正覺寛法親王

入る入るおれ侍り

客入る宮まわらちれ旅路哉
宗因

かけもの見よもて新酒哉
其角

早稲酒やほくくはけ竹の筒
鹿谷

さうりさの鳩の羽のきりり哉
野水

善此山まをを無乃すくく乳
其角

笠よりくまきりる波れかぶし哉
紋水

秋の野や忍くく小鳥りり小鳥
鹿谷

世中やわらりりへて四十か
風虎

草庵乃月見

名月や池をめぐりておもひか
芭蕉

帝おし人を休むる月見か
同

麻酔の詣りて宿根本寺

古のよひに誅くほゆる月見式 同
名月と戸の又も寝ん名月 秋風
月見く故の夜よるるさしめ式 李下
西人とてても月見くけり月 観水

月下獨酌

月尺をやは家式ア妻あひて 蚊足
月夜若花切はくくさ音うな 巴風
きましくも東むくく人月の昏 去來
故人とあつる公けく月見式 野馬
月尺をやは家式ア妻あひて 孤屋
指の人月みるもや木曾此様 破笠

宗鑑の誦のよひ

貞室の考たつた心く
新平の歌つて三人の曲

古襟 月を舞フ我を音式 文鱗

碓氷の小屋の休息
おゆの休息

月のよひ我里人の苦みうん 去來
月見く家士ちのさし音月 冬市
月満く擲于くく音う那 由之
音う啞のかくゆま月見式 去來
名月や市堂此鼓かひて音う 其角

良夜雨意

つらういもころけくや 十四日 同
翠峯のこころ月尺さるよと目此取 彫棠

目撰人うらつめ題を

関るはうもあたまらん川彼の月 鹿谷
赤起の馬くちるまき月いこん 魚兒
商人も尺さるもあたまやあは月 文鱗
夕月や露のひあたる土もあは 且只
夕月を露さるまき鳥の乱もあ 濁子
あうけをころういの月此曇り哉 蚊足
中よ出く月一筋や霄の電 似兮
夕月の霞よちりる小あは 吼雲

銅若うけよ ちりる月尺う那 一林
夕月や目が夕月いころあ人 如泥

秋の夜をたぐりて好けは

秋の夜をたぐりて好けは 約叶
一志より移るああはさう乳 季下

旅の夜をたぐりて好けは
霄をたぐりて好けは
けはさるあはさうり

秋若およ寝あらめ旅のやせり哉 女 千子
あさおも旅さるよよ移るさりり 去來
寐あらさくきくちりり 破笠
旅人平村とよを家さめさ哉 全峰

山里や礎キスダをかゝるまぬして 枳風
子此泣き去るま心礎イソカ 山川
ゆきと此火ヒ燭ロウをたの礎イソカ 蚊足
うらみと奥ウラにおあしき
あらしきまぬすまや坊ヤウの妻 芭蕉

獨床

望ノゾミより遙トホく礎イソカ後ノチの氣キの乳 西比
秋與 廿四句 露荷

面白く物モノうきまはたき 雨アメ 其角
燈トウをイソカ 嵐ハルカの窓マドは月ツキ沈シヅんで 同

ち〜〜ゆ雲クモうららむに襟エリ寒サムイ 同
か〜ら衣イ包ツミの鷹トウ形カタく砂スナ 角
山寺サンジの鼎ヒラをちの形カタくい 角
雲クモ子コ笠カサぬく暮ク霧キリの起オキ卧イ 角
新ニホ衣イ鳴ナリ子を形カタく鳥トリ作ツクり 角
車クルマあけ〜波ナミの落オチる 角
夕ツキ園エン此道ココミチ去サる馬ウマの支カサ離ハみく 角
無ムやと〜の三サン石イシの粟アヲ 角
先サキ獨ドコり屯ツムぬす人をか〜め盡ツク 角
酒サケ賞シヤウ子コの形カタく葉ハ菴アンの止トド出デ 角
水ミヅゆき〜格カキ乃ノ上ノりり細ホソ歩ツクり 同

雨^フ重^シし地^ノ小^シ道^ノ菊^ノ枝^ノ先^ノ折^レん
雨^ノ数^日市^ノハ^カく^ハあ^レ社^ノ葉^ノの^音 文^ノ鱗^ノ 其^ノ角^ノ

旅^ノ抄^ノ

落^レ栗^ノ乃^ハい^ハぐ^ハあ^リと^モ祝^レれ
落^レ葉^ノ小^シ壺^ノあ^リさ^うゆ^る嵐^ノの^音 透^ノ雲^ノ 觀^ノ水^ノ
わ^くる^ハ甲^ノ斐^ノあ^リる^ハ推^ノの^音 岩^ノ泉^ノ
ゆ^るれ^ると^もゆ^るめ^のや^推乃^ハ九^ノ折^ノ 三^ノ翁^ノ
茸^ノ分^ル夕^ノ日^ノゆ^ると^も此^ノ新^ノ葺^ノ式^ノ 觀^ノ水^ノ
童^ノさ^へへ^捨て^レ徑^ノ乃^ハい^はら^らら^ら 同^ノ
柝^ノあ^ると^も松^ノ茸^ノみ^るぬ^白う^那 魚^ノ兒^ノ
松^ノ茸^ノや^柝より^ハ奥^ノ此^ノ葺^ノの^音 孤^ノ屋^ノ

松茸や一日くく乃雨の音 三翁

京出尚日

片^ノ隙^ノも^もと^とに^に残^レす^ハお^もて^式
か^つら^らと^も去^レる^ハ掃^クと^も捨^テる^ハ 同^ノ
谷^ノ斗^ノの^ハ里^ノ餉^ノよ^うも^もみ^る糸^ノ式^ノ 冬^ノ市^ノ
其^ノ角^ノ

旅^ノ抄^ノ

梨^ノ書^ノや^櫛の^ハく^くと^も松^ノ乃^ハ葺^ノ
家^ノ神^ノの^音と^も浮^レ世^ノ乃^ハ村^ノ時^ノ夜^ノ 遊^ノ巴^ノ風^ノ
峯^ノの^ハ松^ノ躰^ノあ^るの^ハ夕^ノの^音 冬^ノ市^ノ

秋山 二句

甲斐^ノの^音も^も尺^ノを^ハさ^う秋^ノ乃^ハ夕^ノ也^ノ 露^ノ沾^ノ

秋山や釣もゆるるぬ鞍の上 其角

閉門 覓句

秋空く日土封くも家麻う那 三園

ねのまきく菊秋波又埒の中 舟竹

秋盡

僧の入る繩乃すくは又秋の昏 不炊

らちりちりうはとちやの秋たれ 一鐵

六容 秋仙

乞食もかづいおまぬかしし 破笠

をの秋を責心虫も蟻 其角

うもさゆ此秋も憎む音儀あて 全

迷懷

月平いゆるをうきと柴の数 同笠

心多あま恋秋のみぬし子 同角

人たれす戀まる恋乃よまはら 同

別まえん入ると本も金むく 同笠

あいうね名證をうらり馬とく 同

あうとあうくく妹もまぬり 同角

鏝ろりく籠たの市もうらひん 同

色酒のせもたのまこ婿めく 同笠

川あや火爐しあひ波まら 同

少捨うくさるぬの縮磨 同角

旅

恋

秋肌や笠の宿る天の下
 松を産所サンゴの多き月
 米買ルの明ルの都へ入むの事
 雪消ケを出る甲斐ハの工ウ市
 夢の事かルや堂トをくルはん
 死出の鳥乃ハ蠟燭を喰
 上レるまレの捨レる此啼キのり
 おもトのりハぬ髪結
 暮アノを躍アる人かハと
 高アよりまキゆるけハの教
 月ツキとハのハの
 同 笠 同 角 同 笠 同 角 同 笠 同 角

無常

秋敷

佛木どりて曉をあら
 定めカのハ義濃の谷ハ納ル先
 鐘カネのハあハんハのハ山
 癩カサ乃ハ富ハのハ世ハをハ悟ル
 柴ハのハ戸ハ深くハ維ハ摩ハのハ人
 乞ハ解ハのハ度ハ會ハゆるハのハ凡
 名ハ桑ハうハ水ハのハ幣ハ園ハをハとハる
 さハ力ハ待ハ加ハ茂ハのハ祭ハれハるハかハん
 瘡ハ落ハらハとハ梯ハのハ身
 かつハをハ軍ハのハ神ハめハ花ハ折ハる
 塔ハ城ハはハるハ人ハ大ハ宮ハ司ハるハ畑
 同 角 同 笠 同 角 同 笠 同 角 同 笠 同 角

秋祇

曾久美那之九梨

不拉乃部

十月十一日餞別會

旅人と我多より水ん砂霽

芭蕉

鶯の心印世のるみれいさ小

由之

糧を分り山陰の鶴

其角

かけありく芝生此霧の浅緑

文鱗

新舞臺月よおいちや

仙化

中の秋盡ユ一片まかつるあり

魚兒

鯨よりし多たくる漢舟

觀水

祇垣や次弟よひくさ波のいま

全峰

齡と浅くま君うりま

嵐雪

酒のこにさかとの直乃並み

執筆

卯月の音を撫るはくり子

翁

鰯つる袖つくはくり子

由之

蘿一面のり橋杭

其角

道ありぬ里よ砂をかひより

枳風

月みや啼ん泊瀬の籠人

文鱗

富翁とく句いも都あつ

仙化

おもしろぬりを訊ぬ傀儡

全峰

途中よこころ車此翁を巻く

翁

仲く舟平めき水一多識
 由之
 花ゆふは夕紅の霞を映つじき
 嵐雪
 別る雁をうくす琴の手
 舉白
 天の家去るうきをの外よ入
 就水
 昔乃ぬけぬれ雪を燒家
 仙化
 花の身乃縄あゆむるりる
 由之
 香の流る水跡乃閑さ
 翁
 明暮を于深の松をかきく
 奉白
 命哉朽まへ船子這蟹
 十角
 起出さるるはらうん海の人さ
 嵐雪
 志く如帝寺城朽むるの
 飲水

藤や石の心坂老日いらほき
 全峰
 小畑さひりさ葉山子伴らん
 枳風
 州の戸者る成酒債るほえら終
 翁
 つひに星を妹よおしめる
 奉白
 薫乃ちめり面白文夕きりみ
 仙化
 懺のささく氏の天王
 其角
 御牧野の笛吹智の童声
 全峰
 僧らるりく腰子さけ杖
 枳風
 足らぬと文字れ子昂う咲く
 其角
 堺の錦蜀をあへる
 嵐雪
 伝夢や寄虫の友よ交りあふ
 飲水

竹

子ノ出ク海苔スルハ此

翁

谷深ク日ウツハ屯の木目乃ミ

拳白

春乃山鳥

由之

芭蕉庵全回郷

時ヲ冬芳野ニテ先ニ旅死ト

露沾

鳥中を送る

まろく此ノ奥乃頭中ニ

素堂

留玉の中ヲ瘦めテ冬老菊

不卜

木かりの吹りうろす

炭雪

鳴千鳥富士を尻くれ塔見坂

杉風

比ノ也や大井の尻佐衣の

蚊足

指すて~~て~~供してあまんとおの

仙化

旅寐さる紙小ニツハちう

枳風

船毎若紙小やねもさ

李下

系下のすまをのく白あり

ぬきんあき送りヤさん時雨哉

文鱗

時多クに溢かり垂ん州乃

舉白

箱根山去くれあき日

由之

蒲固借ス女もあ

露荷

萩枯ぬむつの紙箱

沾蓬

宿まられ宿宿間多

如泥

冬の日袋程去る

溪石

冬くれを君り首途や花の雪

其角

詩歌文章多し一侍る

志くぬづく雪にぬきこる。入日丸
眠り来る。雪をたもてたす。時を火
雪より先よこほり。一これ丸
ゆきさけの山よかきぬ。時を火
蛛のお乃破きよと。ゆき枯葉火
弾のゆきゆき。舞り木葉のな
ら下く。乃木葉集。山はゆき
牛はみ蹄はく。乃木葉の非

深川夜泊

杉風
治蓬
十采
蚊足
冬市
為睦
枳風
好柳

木か〜や夜の木魚は吹やぬ

李下

松下〜木か〜し〜ゆ〜ゆ〜ゆ

巴風

冬結乃人月よある。飄りの非

同

松苗を枯ゆき。目川流る

枳風

萱屋の便おけお。り冬木立

琴風

〜ゆ〜る僧と。か〜〜人あゆ木立

ト千

甲斐山中下りさ。はらひ

ける。お宿りゆめ。つゝ

刀さけ〜あや〜は。露乃地蔵の

破笠

初ま。あや。念ふ。こもる。鐘の音

野馬

雪下りて。せき。さ。い。寒。さ。福。元。丸

永中

吉寺此夜千いりまぬ憶く非
芭蕉いりま根垂よ霜の在盛
素堂

對客

我店の夜千く凡は月乃色
好柳

和好柳子

人をえん冬此ちいおも夕涼
其角

をのの酒債せのこは鮎賣
好柳

塩尻千羽く壽乃杉く水く
由之

夜坐一句

何とれく冬お隣をさうれり
其角

うのく火よ芋やく人の薫ス
同

ほおのうく火おさう洞く那
紋水

門片くく世間ハ寒くゆり
牧足

炭ちさむ音さく氷く麻身式
嵐蘭

灯の影千形ちひる火燧火
魚兒

爐を徳家命つる水く掃の蟻
似兮

炭竈ととくく経よむ法師式
不炊

茶れちり炭やく家成尺よん
巴風

寒蠅

憎まぬくながく冬人冬お蠅
其角

法華を夢ゆりて

法と免くく親もあく火燧式
嵐雪

後坊さや門通る子もみれり

景道

宿僧房

あまの形一 窓^カのちあま冬菜⁺火
駒形⁺千⁺波⁺あ⁺う⁺ね⁺や⁺夜⁺念⁺佛⁺
川⁺凡⁺や⁺わ⁺し⁺あ⁺信⁺寒⁺念⁺佛⁺
曉⁺の⁺つ⁺く⁺は⁺よ⁺ら⁺や⁺念⁺佛⁺
星⁺斗⁺の⁺五⁺位⁺一⁺夜⁺念⁺佛⁺
波⁺浪⁺千⁺深⁺桶⁺の⁺ち⁺と⁺と⁺哉⁺
水⁺乃⁺鈴⁺日⁺蹴⁺の⁺う⁺ね⁺り⁺哉⁺
あ⁺の⁺男⁺袋⁺の⁺麻⁺の⁺う⁺ね⁺り⁺哉⁺
鈴⁺の⁺ぬ⁺鷹⁺の⁺暗⁺の⁺尾⁺上⁺哉⁺

其角 三園 湖水 其角 湖春 冬柏 由之 山夕 冬市

十二月九日ちつぎのうらら

初⁺言⁺や⁺幸⁺と⁺菴⁺の⁺千⁺の⁺孫⁺也⁺

芭蕉

弟友人

君⁺火⁺を⁺さ⁺け⁺う⁺ね⁺を⁺た⁺も⁺を⁺人⁺言⁺ま⁺る⁺け⁺

同

山荘の夕言

雪⁺千⁺の⁺松⁺の⁺小⁺松⁺原⁺
松⁺の⁺市⁺に⁺叫⁺ん⁺言⁺れ⁺と⁺ま⁺
窓⁺の⁺間⁺は⁺言⁺の⁺夕⁺の⁺那⁺
雪⁺の⁺音⁺も⁺た⁺る⁺喜⁺

露沾 江何 魚兒 孤屋

友静亭に物々

比⁺良⁺の⁺言⁺赤⁺鯉⁺の⁺詠⁺め⁺け⁺り

自悦

をたつふ小燈へもゆぐて言をみる
り鳥痛所見さるー言れくま
う言れ破れりつひの煙うか
初言午目をたぐかゝる、篋竹火
言活活公よ初言
そつ言言盆りもも言言詠哉
ろめ朝言言んよあ
日言言く鼓言言言言あーた火
漸不言言言の竹よほ言言炭
繪絹張の竹をこ言言言

校居

庚辰四十一

文鱗

濁子

自棄

由之

其角

露沾

露荷

其角

二言言とけ言言言言道言言言
ぐれくとし言言言言言言言
辛言言よめ言言言言の詠言言那
え言言言やけの干言言言言乃言言
言言言言言先言言言言言言
慶運言言言言言言言言言言
夜ありや衣言言言言言言の言言
初言言言言言言言言言言言
白川や言言言言言言言言言言
草菴

沾徳
安重
観水
蚊足
魚兒
敷水
孤舟
仙化
東頃
其角

門乃言言言言言言言言言言

雪此日やほろり日比の道ちりし
波のうへに雪あり規とる人々
門の介弁舞者くくみろ終哉
雪深し柳頭白ふろめ柳
梅枝およぎまもかや雪霏
徳倉の僧あつらん冬の梅
漫成五倫

全峰
枳風
斧鉞
鈎雪
口齋
露沾

君臣有義

家の子まらぬ心忘るれとすれ
父子有親
鯉汁や懐きよ兜あき程くじ

其角

夫婦有別

新たさめねと おぬと長形少
長幼有序
袴着ハ娘の子れもくはり乳

朋友有信

君と我嬉しきを返さあつたう
お家此とくおぬせんさびを解

沾荷

節分

豆とわく我もん若鬼くく人
市又入るまじくお家師を式
よび多をぬきさぬまじく

野馬
素堂
魚兒

雄平 新あじ月のしんくうお
室乃 清子 足袋 女師を也
子を祝に
紋水
如泥

羽子 扱ふもち矢を新あ師を
秋をよむ方れはくときと
淋くさる船子あつと海と
川あやつりまは海り年
年のあや人はよそ乃十
去來
孤屋
枳風
文鱗
露沾

恙けく大晦日名寐酒
わくはああ市れ笑や年の
致足
奉白

閑

し年の一葉王子の狐尾よゆん
晦日くや赤念れ入く大晦日
月雪くはさそりけしり乃昏
し年の梅
其角
素堂
蚊尻
芭蕉

貞享丁卯歳霜月仲三日

位の押も心わらぬひるひの4時なりて美を申
そ、おれ先ははくぬきくさめ、醫術薬力とあり
つぎ、神のまゝなりて、これむくさき、そとせんと
はせとせり、ひびき、ほろ、ぬき、あはし、こゝろ、いひ
とれ、醫王善遊、いひのま、ト、る、新、旨、あり、出、つ、い
こゝろ

其角

二時乃つて遊をめぐり、思ふと、さきり、が
と、いふ、向、後、く、い、て、又、名、婦、り、は、は、た、た、中、中、
さ、り、り、目、さ、命、一、ま、り、と、懸、念、ら、る、は、日、さ、り、不
可、思、議、の、感、應、あり、と、一、滴、の、く、さ、り、を、さ、け
ほ、く、ま、り、と、あ、り、て、る、や、う、と、お、ほ、え、け、い、き

萩ノ一

う、れ、今、の、事、と、十、う、つ、ら、胸、膈、い、う、か、ひ、く、お、く、く
と、其、下、と、も、こ、こ、の、月、を、枕、と、さ、て、し、め
お、の、糸、を、霧、ぐ、く、人、官、後、出、つ、い、ひ、清、水、を、さ、り
け、こ、も、ご、も、の、雪、に、吸、ら、ん、一、糸、と、も、ホ、と、ぬ、く、ひ
の、さ、り、ぬ、き、ひ、ぬ、き、い、も、と、と、り、か、ら、り、て、な
と、い、ま、は、身、あり、物、の、衣、衣、志、れ、と、ぞ、位、法
あり、行、回、を、さ、り、り、と、さ、り、と、ま、世、ま、り、は、を、さ、り、
と、せ、け、る、や、り、み、と、せ、る、と、く、は、秋、折、さ、り、老、の、い
ち、り、は、折、し、毛、さ、り、と、む、ま、り、皆、し、め、て、い、ま、
の、衣、法、と、さ、り、と、ま、り、は、ま、の、い、ひ、も、は、り、と、か、り
く、しく、取、め、る、と、世、の、あ、ま、り、は、り、列、つ、ん、と、さ、り

秋の光を翫さば何事ぞ此七とせよまことおぼ
陰の露とききえり水はくぬけ侍もはわつら
あつさあつさあつさ

其角

信濃ももきり子あり乃乃月
とかくまうけき病をうかひ侍り
あつさあつさあつさ

東光

子と嬢と毎のかくて見んあつ月
くほなを月のおろみらりよき
百里より精を譽み十里よ

三谷はといつらされそ又病
まき遊もはあをかくをり燕守

秋三

あつ月ハ十歩ハ残を擲り架

其角

秋も羽織もくよ秋の露

仙化

細流の糸帯を萱う斬りて

嵐雪

あつれもやと申りに海は怪

神叔

世の異事石小残り一河京市

介我

馬茶を煮るう深底の水

枳風

庭の菊度うけりきくすわる

桃鄰

六丁一瓢きく格返宛

幸隣

拙い脚足をあつさ一焼大親

鉄松

陰をみるると代淨猫橋の本

芝蓮

息吹り侍るを地をゆり連

素糸

降らすくし電を過る白雨
舟の舟を問う人三何一入あり
舟さくさくしきくさくさく
門立の浮世を益乃十三日
つまける糸千一泪の啼
瓢箪の流るうちの葉かくれ
小倉堤を以てゆく月
温純湯池肌候り祖多梨
お乳くとり持つての短し
髪ゆりぬ虫歯とつら一花を
雪無く梅さくしきくさく

平砂
可聞
萬卷
東湖
其角
神叔
桃隣
仙化
介我
萬卷
素イ

江をめぐりて四方を渡る鹿造
雪くしきかきくさくさく探幽
曉の朝を無きく家白牡丹
舟を費さく通る舟戸
足履せききかきくさく対馬仲
紅塵掛て中片をさく
大酒を糺ひし教小未練の肌
鼻息くさくさくさく焼の灰
も松の舟我ひしけり費り
おまへし賄りすけり貂
いつ人よ赤きけ白ひけり人

平砂
其角
介我
仙化
挑隣
神叔
介我
万卷
神叔
素イ
其角

蔵ノ四

端々海ありて其長襟 麩
挿梁乃極をかきし子朝日
料理をさしけく白雲宿坊
室よりそ態を伝ふ守いふ
海一お枝の辛 カラキ 肉桂
こい夢座あましく彫り
夫人のあをを西の意人
雙より春を伝ふる勢
氣れ然りぬ三由のち
擗の下に明るし本音はじ
持若無天き射終ありり

今我
平砂
仙化
桃隣
萬卷
其角
平砂
素イ
桃隣
仙化
神叔

夢う紛おく忘れ軒 新室を
只佛名を盲 禪つ
高きと風を伝ふ世の鏡
海を忘る海士乃 カモリ 妻
羽志乃嚴法 福く 月若西
老父の嘆を此終る 嘉
病家れ伽とく

四吟

薛乃井の梅 終るる 碧油持
三年月日 終るる 垣の虫
月露より 細炎か けり 豈終る

平砂
其角
介我
素イ
萬卷
仙化
仙化
介我
共角

多本ひと月を酒にまき
やるとのふ梅を、御本おまき
夕日あまの菟のてらうと
買針を袖ふさし、さるをた
あしと忘八の折檻をいふ
候と、たき火もゆるかもし
ほを投る帯、さる仕男
此ん、めをいを隅田川
荷ふ、鳥啼あり
孔雀のをけふ、床の上
神おこし、用心なり連

我化叔角我化角叔化我
神叔

金とくそ、大振袖の伊勢系
ゆくの、人やりさる
持る、そそめ、花の陰
の、月や縮緬も
解口の、白鷺、山
門、年をら
寐、母に
貧乏の、風とい、
醒る、日、
六月の、

我叔角我化角叔化我叔角

いつれの代より花をなす
下母ありおまふしを振うそ
あられし人若持こ喰切
ろくかめ新三弦より舞る月
お宮茶後まつまに葉のま
秋より多舞をとり履の音
嵐紅ぐりの音をうかふ
橋のたれ光の何く流せら
ほちの呼バルハツまの歌
蝉丸も目の也りり死乃を
をの氣おや庭きんあ葉

化 叔 角 我 化 叔 角 我 化 叔 角

蕨ノ七

八月十日

かきこく三吟

葦也泣あそむ乃中よあま
意より菌の生はあ鐘
及る海魚ハ舞番をれあそ
帆先あれむ背照る月
版あく田中庭後と見えま
雨あら下あ店の半茶
何年り葉はよす石の塔
埋ま井よりもまら板垣
史あくそ生平はまの男紋

神 叔 其 角 介 我 叔 角 我 叔 角 我

袖エリけねき思ひてお人
奥かゝれかゝるも思ひ也違ひは
經の違者ハみれ法華宗
組りむらゝ合々料理方
此海さうり芝海老も飛
小統もあゝる船や風の流
串柄買て村の案内
肉長よる露面もるを花の外
解きをもいとふ女減を
若ん世の風袋也たりあ
糠を移るたをやせり

角叔我角叔我角叔我角叔

源一さゝは推の水よ牛橋を
宇の毎のかゆ善作
曝ももる食工や中記の畜
親子してかゝ愛を懐
燃油と案所をえんをを
雪月流る軍踐る月
西原のかゝるも革袴
遠く川あゝるのほり大船
旅人先ッ蛇々々海り
この船を置り入る鳥
船屋に下部をねむ麦畑

角叔我角叔我角叔我角叔

涼喉乳のつとく後
ゆいさみ煉茶を色を湯を
花の時分中一日の階
二百文批人としてぬき
捧筆をのこす震む言種

八月十八日

痛定ふよりとせむる年
とよみのいとゆいさみ
法師古小法師の湯
くま湯流るるに
月元一くわし即真

寺北月葡萄贈き葉よとん

我角 叔我角
其角

三ノ九

柝拍の葉島へち 倭
鈴青尔虎越のきぬをほくひ
とやいしとけさ川の番
齋は名紙書高うまひ
此類を去り体封つと
あはれ物あはれ教を志と
乞食入りくも燕の一
藤すし汲水に月夜夜
先とらあさ酒中白瓜
授けれ融くあささひ刀
舞といふくあささひ子

固丈 孤屋 利牛 丈角 牛屋 丈角 牛屋

いぶすまのしおのま現く亭より
此後より中他聖此より
日かくれく大津さもある結雨の月
も湯一さいりうまを
花の陰家のり屋うの小町
均へのゆもあけ埃
室作娘を安より悦び
武若娘より厚人を買
蠟燭の心をこころむと上
ゆらと袂より似蝶乃
十たうりうまを卯の化
十

牛 角 丈 牛 屋 丈 角 屋 牛 角 丈

伏屋よ似る依教の言
投原乃霜の中より虹
はねまを石佛入
恋の悲泪あほくえ
孝な娘と人の志
皆身と四季の田業の
秋たぬ残のま
焼魚いつうあ
墮者より賣る
ふれつ物と
江戸乃も見

丈 角 屋 牛 角 丈 牛 屋 丈 角 屋

あつ月やとほりも群々帰め
みづ月とぬきまのをるあつ月

色まゝの住まふ月り

住まわぬ宿の月もや五ツ色
あつ月や粟麻尾さく蒲萄
月のふも年々侍ほり茶酒
橘人も時をこのおる月も
あつ月や男すまぬおる月も
あつ月や白井中一色の青も
あつ月や一色もつくる酒の味
あつ月も月のさかや人のさか

至曉
青山

巨山
可明
桂花
酉花
吼雲
白之
是吉
水谷

三ノ十三

酒樽とこころしと海と月の色
あつ月や油志ほり月も
あつ月や見れ子、海やさの
あつ月に吹雪ゆも一色
海と石船ありさつ月
あつ月や跡とほる坊の昔
あつ月や玉所なまの枕
あつ月や高きさつ月に押
あつ月や橋中水さつ月
あつ月に海もさつ月
あつ月平

節水
和水
林也
雨夕
夏林
鹿山
池石
楓橋
冬鶯
鉄松
正春

昔者魏志の
 集あ中の
 あもく
 書を投

天明戊申春

更



東坡滿庭芳帖	同定公法帖	同赤壁賦	蘇東坡集帖	星鳳樓帖	唐太宗法帖	晉王羲之官奴帖	尚書堂藏版書目唐刻和刻古法帖賣買正舖
<small>大字種 正面</small>	<small>真碑</small>	<small>楷書</small>	<small>真行碑 八</small>	<small>自漢至唐 名家書筆</small>			
一帖	一帖	一帖	五帖	十二帖	一帖	一帖	
同琵琶引	同般若心經	同十七帖	同詩帖	董其昌墨妙	同乳母帖	蘇東坡天際帖	
<small>行書</small>	<small>楷書</small>	<small>碑書</small>	<small>州書</small>	<small>真行碑 八</small>	<small>楷書中字</small>	<small>行書</small>	
一帖	一帖	一帖	一帖	六帖	一帖	一帖	

董其昌陰符經	行書	一帖	子昂天馬賦	行書	一帖
同 晚晴賦	行書	一帖	同 艸堂詩	楷書	一帖
同 神仙篇	行書	一帖	同 洛神賦		一帖
同 將軍帖	行書	一帖	董其昌畫錦堂記	大字正而妙刻	一帖
同 寶鼎歌	行書	一帖	同 龍虎帖	行書	一帖
宋 蘇米法帖	東坡 米芾 二人	五帖	古法帖流筆新製數品		
米元章露筋之碑		一帖	五經	楊齋点	十一册
同 無為章	行書	一帖	以之要艸		七册

王羲之鷺群帖	大字草書	一帖	子昂龍口巖	草書	一帖
同 般若心經	大字草書	一帖	同 龍興寺牌	楷書	一帖
同 筆陳圖	楷書	一帖	同 海棠詩	大字草書	一帖
歐陽詢行書帖		一帖	同行書千字文		一帖
張旭石記序	楷書	一帖	董其昌日飲帖	大字行書	一帖
懷素聖母章	草書	一帖	同 東方帖	大字草書	一帖
東坡醉翁亭記	草書	一帖	同 宏訓章	行書	一帖
同 表忠觀碑	行書	一帖	同 特建帖	行書	一帖

東坡黃庭帖	一帖	米元章	肅立詩帖	一帖
文徵明石丈帖	一帖	趙子昂	玄武殿碑	一帖
草訣百韻歌	一帖	同胡笳十八拍	行書	一帖
中庸古注	一冊	文徵明言懷帖	大字	一帖
婦人方彙	一冊	董其昌洛神賦	楷書	一帖
同	一冊	同	皇帝帖	一帖
大雅堂楷書千字文	二帖	同	正陽帖	一帖
無幻艸變百韻	一冊	同	卜居帖	一帖

晉王羲之大雅集	一帖	宋東坡畫記	正書	一帖
同行書十七帖	一帖	同	肅立詩	一帖
同王獻之鵞群帖	一帖	宋米元章	十紙說	一帖
漢蔡邕邕有道碑	一帖	同	少年行帖	一帖
唐懷素客舍帖	一帖	同	尺牘九帖	一帖
唐歐陽詢化度寺碑	一帖	趙子昂	赤壁賦	一帖
同	一帖	同	滕王閣序	一帖
唐李邕神廟碑	一帖	同	白雲齊法帖	一帖

祝枝山君王帖	正面刻	一帖	文徵明醉翁亭記	一帖
同 秋真八首	正面刻	一帖	大雅堂八景詩帖	正面刻 一帖
道風海陽帖	正面刻	一帖	溫疫論解	恭定先生註解 五冊
同 秋款帖	正面刻	一帖	校正書字引尚書堂版小本	二冊
行成卿琵琶行	正面刻	一帖	俳諧其角七部集	二冊
同 胡旋女	正面刻	一帖	同 幾勺題林抄	五冊
三藐院三十六歌仙	正面刻	一帖	新題林抄	五冊
尊圓親王體以呂波	正面刻	一帖	洛陽十二社靈驗記	一冊

鐘繇千字文	一帖	顏魯公神道碑	正面刻 一帖
王獻之法帖	一帖	智永古體千字文	一帖
晉王羲章草帖	一帖	宋元章墨妙	快入 四帖
虞世南行草帖	一帖	同 繼錦堂法帖	大字 一帖
歐陽詢溫公碑	正面刻 一帖	同 水勢帖	正面刻 大字 一帖
同 十首法帖	正面刻 一帖	同 長年帖	一帖
唐艸聖三大家帖	懷素 張旭 李台 一帖	同 獅子贊	大字 一帖
柳公權玄秘塔碑	一帖	同 天馬賦	中字 一帖

東坡大江東帖

州書

一帖

董其昌唐祀帖

一帖

趙子昂浣花帖

一帖

文徵明千字文

行書

一帖

同 艸庵詩

正西刻

一帖

同 牛門朝見帖

中字

一帖

同 蘭亭記

一帖

同 詩帖

大字

一帖

草韻

自漢至明諸名家草書
廣集摹勒又三喜後先集

四冊

二王法帖

義獻

一帖

万象千字文

篆刻家座右字
一本也廣德書

一冊

枝山草波百韻

一帖

篆書唐詩選五言絕句

一冊

龍州廬秋月帖

一冊

同 七言絕句一冊

此書八漢魏晉元明三至元三諸名家草跡其外
又并大篆小篆古篆多廣集書家篆刻家字

艸書韻會

自漢至金集名家艸書
唐版舶來版行 二冊

王羲之蘭亭帖

一帖

艸韻彙編

自漢至明集名家艸書
華本翻刻 全并六卷

同 黃庭經

楷書

一帖

唐褚遂良法帖

真艸

一帖

同 東方朔贊

楷書

一帖

同 蘭亭記

一帖

同 黑妙帖

真艸

一帖

漢魏八分帖

一帖

同 孝經

艸書

一帖

魏鐘繇宣示帖

行楷

一帖

同 弘文館十七帖

一帖

唐顏真卿法帖

艸書

一帖

同 周府石屏

行書

一帖

同 懷素千字文

大字

一帖

同 夫朗帖

一名鷲羣帖

一帖

瘟疫

論 明吳又可原本
荻野岩洲校正

二冊

温疫論標註

明吳又可原本
愚休伯芝標註

二冊

同 方論

二冊 同類編

清劉松峯評釋
日本多紀法眼開

二冊

諸家經驗方選

荻野淵先生閱
小本一冊

此書ハ諸名家之秘ト云 經驗ノ方ヲ
フカク集録シタル書ナリ

同 續名家方選

淺井先生門人
村上等順著

此書ハ諸家經驗之奇方名方イテ
キチ集メテ初編モレタルヲ補フ

名家方選三編

淺井先生門人
平井圭壽著

此書ハ初編ニ基キモレタル名家ノ秘方
ヒロク集メタルカラム

名家灸選

淺井先生門人
小本

昔者書ニ灸ノ方ハ傳名家ノ秘ト云知ラズル
名方ハ今書ニ載ルカハ此書ヲ集録書ナリ

續名家灸選

淺井先生門人
平井圭壽著

此書ハ諸名家又田舎ノ俗中ニ秘テ人ト
傳タル名方イテ初編ニ補フ

同 二編

同著

初編ニ補フモレタル奇方ニ効テエタル者
多ク故大集ニテ三編トシ全カラム

本朝古今書畫便覽

懷中本
一冊

此書只建曆建久頃ヨリ文化ノ今ニ至ルテ書只三筆
跡ヲ祖ト画全佐家狩野家或雪舟其外遊画ノ人々
ニ及テ附テ詩歌連俳雜ノ業時人知識ノ僧衆等國字四
十合頭ヲ以テ分子安廣ク編集シ書画ノ好ム人辨用
以書只京師今世名譽ノ人物姓名字号居處等事並設
儒医書畫詩歌ノ元ヨリ文雅ノ人ノ門類多ク分子多ク記ス

平安人物志

懷中
小冊

此書撰州浪花ノ世名譽ノ人物姓名字号居處通
符等ヲ記平安人物志同様ニ未ダ記ス

浪花卿友錄

同小本
一冊

此書古今ノ儒家ノ傳并ニ著書ニイタルニ未ダ
記シ故好ノ便ナラシム

儒林姓名錄

同小本
一冊

此書只山城ノ國八幡放生會祭礼行列ノ次第委繪
圖平カテ目前ニ拜カカク來廢ニ至迄記産録ノ本ナリ

男山放生會圖錄

一冊

周伯先生著書且ニ天文地理人物各々蘭説ヲ以天地人
三才ノ明理ヲ素人初心ノ人多ク其師ヲ至其理ヲ知シテ書思

三才類管

三冊

此書只本州細目ヲ和語ニハラス修治能海ニ至ルテ
初心ノ人多クモ分リ安クヒラカニ著セシ書ナリ

倭語本州細目大成

六冊

邦會用文章 大成大冊

類合子字の文 類合子字の文 活版印刷の冊

同小字ありの付 同小字ありの付 活版印刷の冊

續類合子字の文 續類合子字の文 活版印刷の冊

懐宝園文章抄 懐宝園文章抄 活版印刷の冊

拾玉用文章抄 拾玉用文章抄 活版印刷の冊

字彙用文章抄大成

大昔り年中高貴の書

此書は邦會用文章抄の大成大冊に類合子字の文を附し、續類合子字の文、同小字ありの付、懐宝園文章抄、拾玉用文章抄、字彙用文章抄大成、大昔り年中高貴の書を附す。

一冊 傳見

一冊 艸書要領 王羲之書 五冊

一冊 艸字彙 唐本翻刻 十二冊

一冊 歷代草書選 白芝山撰 五冊

醫方口交頭書

千金方樂註

食療正要

廣參品

怡顏齋介品

古狀揃童訓

本草原始

俗字筆海指南車

北山及松子

松岡女達

同

同

増田春耕訓詁

中村三出子著

三冊 西溟余稿

四冊 同詩之部 同

四冊 大學 素翁改点

一冊 相劍正傳 近藤素堂門

二冊 古今和歌集 小本

一冊 同卷懷形 薄葉摺

五冊 同朗解 宮下正岑著 八冊

二冊 增補以呂波韻 寸珎 黄揚板 一冊

釋大潮

同

同

同

同

李邕雲麾將軍帖	一帖	歐陽詢隸王閣序	一帖
董其昌華林帖	一帖	近藤春夜帖	八分書 一帖
子昂香雪堂法帖	一帖	御家慶文帖	勝見先生 三帖
同前赤壁賦	一帖	王元美尺牘	一冊
東坡西湖詩帖	一帖	拖入花簿	十葉之流 二冊
同歸去來詩帖	一帖	後篇	同 三冊
姜立綱古十字文	一帖	三篇	東山流 十冊
米元章鳴玉館法帖	一帖	同精微	同 三冊

京都三條通榊馬場裏八
書林 堺屋仁兵衛板

古法帖流筆新製品彙

宣志	諸家細字	一枝價銀五分
同	東坡一流 子昂楷法	枝價銀五分
綴文	諸家習筆	枝價銀六分
生華	諸家消息	一枝價銀九分
同	東坡一流	一枝價銀九分
吐虹	諸家清書	一枝價銀壹文目
天朗	諸家法書	一枝價銀一及五分

龍鬚友

諸家二行

一枝價銀二角八分

貯雲

諸家一行

一枝價銀四角三分

同木軸

同上

一枝價銀六文目

同大

諸家大字

一枝價銀十二文

同大

同一字書

一枝價銀壹角二分

諺曰能書雖不撰筆用秃筆而不能成書以精筆而可
到達志余年來好古法性因茲諸家之可應運筆謀而
製之好士之君子庶幾枉駕賜採覽云書博尚書堂識



天明七丁未年 仲冬日

東都書林

西村源六

皇都發行

中川藤四郎
菊舍太兵衛
鍵屋仁右衛門
野田治兵衛

